

2011/1/10	関路恋	もろともにふたたび須磨の袖へだて閉ざしかたしや関守(せきもり)の影	もう二度と一緒に住むことのない二人は、須磨の関の番人に袖をへだてられ、恋をかたく閉ざされたような最後である。	◇掛詞「須磨×住ま(ぬ)」 ◇歌枕「須磨」 ◇参照『源氏物語 須磨』	◆男女どちらが詠んだのでもなく、関守が詠んだのでもなく、三人を傍観して詠んだ点には、冷徹な美しさがあり、目を向けるべき(戸井留子)	◆忘れていかにつたへん逢坂のせきとめあへぬ袖のけしきを(袴ちの子) ◆世の中は関なき道も心からかたみに露の別れあるとや(青柳香織)
2011/1/10	海辺恋	我が涙かけかけても消えわびぬ忘れがたみの貝の下燃え	私の涙は流しかけまいと思ふけれど、そういうわけにはいかず、泣いてしまいます。そして、流しかけても、涙は消えないのです。その涙をかけても消えない、恋の火ですから。私は貝のように、あなたを忘れがたく、陰で泣くばかりです。	◇掛詞「忘れ形見×忘れ難み」 ◇音 力行音	◆力音が、心地よい響きを持っている(戸井留子)	◆うきまくら逢ふことなみのよのそでにみをつくしてもみる目なきかな(袴ちの子) ◆うつりゆく花は忘れんはまゆふの心の色を海にながして(青柳香織)
2011/1/10	河辺恋	つつみあへず衣(きぬ)の下(した)行(ゆく)水にほひ上毛(うはげ)にうつる花の濡れ色	包むことができず着物の下を流れゆく涙の匂いと、黒髪に染み移ってゆく花のような濡れ色は、川の水の流れの匂いと、水に浮かぶ鳥の上毛の綺麗な色のようにです。	◇対句「下、にほひ//上、色」 ◇参照「心には下行く水のわきかへり言はで思ふぞ言ふにまされる。」「(『古今和歌六帖』)	◆「下」上、「水にほひ」と「濡れ色」は、漢詩の対句のように整っていて、なおかつ言葉の流れも美しいものだが、色歌の趣が濃い気もする。この歌は、殿方が詠んだのでもなく、女自ら詠んだのでもなく、涙の河のほうが人間の女を詠んだ冷え冷えとした官能美をたたえている(戸井留子)	◆名取川いはせうつつの夢にまで見せし人に恋を言はな(袴ちの子) ◆わたらぬといひし人さへたのめつつ渡良瀬川の恋のながめは(青柳香織)
2011/1/10	寄雨恋	衣々(きぬぎぬ)の忘れがたみに重ねてし身を知る雨の帰るさの雲	お互いに脱いで重ねていた着物を着て別れる後朝、忘れがたさの形見として、雨の降る中、悲しみの涙を流しましたね。あなたの帰りの道にも、雲が幾重にも重なっていたのです。	◇掛詞「衣々×後朝」「忘れ形見×忘れ難み」 ◇参照「身を知る雨は降りぞまされる。」「(『古今』)	◆「身を知る雨の帰るさの雲」、流麗な哀調(戸井留子)	◆黒髪の上の空なるわが身よりたもにかかる夕やみの雨(袴ちの子) ◆もみぢふるくれなゐ色の雨しづくもりし恋のかごとばかりに(青柳香織)
2011/1/10	寄風恋	白妙の身にしむ色の袖の風にかへすがえすも消ゆることのは	身に染みるような色の風が、私の袖を幾度も吹き返しています。その風の中に本当に本当に消えてゆく、優しかったあなたの言葉なのでした。	◇枕詞「白妙の一袖」 ◇縁語「白妙、袖、かへす」 ◇本歌取「白妙の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く」(定家)	◆定家の歌をいっそう圧縮した上句の共感覚が、悲恋をひとしお清廉にしている(戸井留子)	◆面影をはらふ手ではいたづらに風そふ雪もはやつもるなり(袴ちの子) ◆かげろふのほの見えし日の春風にいとどゆれても消えぬ面影(青柳香織)
主催: 岩崎純一・ 共感覚者 和歌の会	歌数: 8首 歌人数: 2名 自歌数: 4首	『共感覚歌合』(きようかんかくうたあはせ)			評	派生歌など
2011/3/5~5/15 即詠	共感覚の歌四首を詠むこととした。 出題者: 袴ちの子・岩崎純一 衆議判					
	◆特設ページ	左記の特設ページに全歌掲載。				
2011/3/5	聞香	よそに聞く梅の移り香幾夜経てのちやまことの我が袖の花	今は誰か私とは別の女の袖に聞こえている、あなたの着物の梅の花の移り香は、幾夜経てば現実に私の袖のものになるでしょうはかないことですね。夢の中であなたにお逢いしたのちは、いつ逢えるかも分からなくて涙を流す私の、身にしみるような色をした恋の終わりは。	◇参照「梅が香を袖にうつつとどめてば春は過ぐとも形見ならまし」(『古今』)	◆人知れずつらぬきとめぬ夕露にたまりし人の残り香を聞く(袴ちの子)	
2011/3/19	沁色	はかなしな夢見しのちは白露の身に沁む色の恋の限りは	白糸の滝のように一すじ一すじ落ちる涙の音を、恋の尽きた袂に映る月に見ています。	◇参照「はかなしな夢に夢みしかげろふのそれも絶えぬる中の契りは」(定家)	◆月草の身に秋風の色沁みて花よりほかのおとなひもなし(袴ちの子)	
2011/4/23	見音	白糸のすぢごとに鳴る滝の音(おと)を袂の恋の月に見るかな	散りそうで散らない、いいえ、やがて必ず移ろっていく桜の、それでもやはり少しは残る色に匂う袂の着物を着ていた人の面影との、別れの果て。	◇参照「ぬきみだる滝の白糸くりはへてよるとも見せぬ月の影かな」(後鳥羽院)	◆闇に見る虫の音とほき面影に今日をかぎりの秋風の吹く(袴ちの子)	
2011/5/15	匂色	散りわびぬうつろふ花の残る色ににほふ袂の面影の果て	◇参照「消えわびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの森の下露」(定家)	◆花の色に心にほひて来る春に風薫るのちのわびしさを聞く(袴ちの子)		
主催: 岩崎純一	歌数: 36首 歌人数: 10名 自歌数: 27首	『東日本大震災追悼和歌』(ひがしにほんだいしんさいいついたうわか)			評	派生歌など
2011/8/18 随時判	出題 随時判	東日本大震災に関する和歌を詠むこととした。 出題者: 岩崎純一 衆議判・投票				
	◆特設ページ	左記の特設ページに歌掲載。				
	◆現代短歌参加者用(「うたのわ」での開催)	左記の特設ページに歌掲載。				
2011/8/18	大なみ	忘れあへず岸寄る波のうつせみに消えし宮城の荒浜の沖	忘れることはできない。岸に打ち寄せる波のうちに、現実に命の消えた、宮城の荒い荒浜の沖の光景を。	◇掛詞「波の打つ×空蟬に」「荒(き)×荒浜」	◆花巻の岸に玉巻き飛ぶ蛭あくがる人の光なるらん(袴ちの子) ◆夢うつろ幻を見ればよからまし榴ヶ岡の野辺の白雲(袴ちの子) ◆彦星に逢はんあの世の七夕や七ヶ浜打つ波のいとまに(青柳香織) ◆人思ふ心はつひに岩手山やまぬ大なみばかり声して(青柳香織)	

2011/8/18	大なみ	花に似る人のみじかさ岩沼にそれ もまことの弥生月かな	桜の花に似ている人の命の短さが、そのことを言わぬ間に本 のこととなった、三月の春である。	◇掛詞「言はぬ間×岩沼」 ◇宮城県岩沼市		
2011/8/18	大なみ	八重波(やへなみ)のちぎらん夜 の心だに岩手かれしや荒波の袖	八重波のようにしきりに夜を契ろうという心の約束を言わないで、 荒波に流されて陸を離れて行った、涙の袖よ。	◇掛詞「言はで×岩手」 ◇歌枕「岩手」		
2011/8/18	大なみ	心にはなほ面影をとどめたる我 が女川の夜半の景色よ	我が心には面影をとどめていながら、現実には消えてしまったの だ。女川の景色も、我が恋人の姿も。	◇掛詞「女×女川」		
2011/8/18	大なみ	ぬばたまのその黒髪の子林今や 待つ夜の永遠(とは)の長浜	林のような若々しい黒髪の子も、今や長浜の沖に、長く永遠に待 てども帰らぬ存在となった。	◇枕詞「ぬばたまの一黒、夜」 ◇掛詞「若(き)×若林」「長(き)×浜」 ◇仙台市若林区、石巻市長浜町		
2011/8/18	大なみ	太白(たいはく)の波の別れのま た夜半のなごりに消えしけれなみ	太白星が落ちて出来た仙台の海岸で、波の別れとなった夜、再び 波が寄せては返すあとの余波に、消えた人々の紅涙の袖が名残	◇仙台市太白区		
2011/8/18	大なみ	あり頃青葉の奥のほふ影に 散りて命を誰(た)が定めけん	桜の花が匂い立っていた頃、花の命が散って今の夏の青い木の 葉になることを、誰がさだめたのであろうか。	◇掛詞「青葉(夏の青葉×仙台市青葉区)」 ◇縁語「(花)、青葉、にほふ、散る」		
2011/8/18	大なみ	大津波あへなきものを一ノ関袖の 別れはなどつらからん	大津波は仕方のないことだが、一ノ関の関所でお互いに別れる 袖は、どうしてつらいのであろうか。	◇岩手県一関市、一ノ関駅		
2011/8/18	大なみ	涙川広瀬名取の落ち合ひに津波 かた敷く橋姫の袖	涙の川。広瀬川と名取川の落ち合いで、さかのぼる津波を片敷く 橋姫の袖よ。	◇歌枕「名取川」 ◇広瀬川:名取川支流		
2011/8/18	大なみ	我が胸の奥松島の夕暮れに焼く や焦がれの塩竈の浜	我が胸の奥にあの人の帰りを待つ奥松島の夕暮れを見つつ、塩 竈の浜で心を焼き身を焦がす。	◇掛詞「胸の奥×奥松島×奥待つ島」 ◇歌枕「松島、塩竈」		
2011/8/18	大なみ	三陸の岸のつづらの恋道に人よ りはやき久慈の白波	九十九折りの三陸海岸のような恋の道に、あの人よりも早く白波 が訪れた久慈の地です。	◇三陸海岸、岩手県久慈市		
2011/8/18	大なみ	大波に折るる宮古の八重桜にい し昔の九重を見し	大波で折れた宮古の八重桜。過ぎ去ったいにしへの昔の、桜咲く 宮中の跡を見るようだ。	◇掛詞「宮古×都」「去にしにいにしへ」「九 重(多重×宮中)」 ◇対句「宮古、八重//都、九重」 ◇岩手県宮古市		
2011/8/18	大なみ	叶ひ終へし恋の袂の古川にその 人も亡き今の新傷(あらさず)	叶ってしまい、川のような嬉し涙も古びてさえた私の恋の袂。そ のお相手も今は亡く、私には新傷が残る古川の地です。	◇掛詞「袂の古(る)×古川」「新傷×荒傷」 ◇対句「古川×新傷」 ◇宮城県大崎市古川		
2011/8/18	大なみ	八重の戸をたたく水鶏(くひな)の 八戸(はちのへ)にちぎる命を破 る白波	水鶏の鳴き声のように、何軒もの家の戸をたたき、生き残りを約 束し合った人々の命を破った、八戸の白波よ。	◇「八重の戸//八戸」 ◇青森県八戸市 ◇掛詞「八戸(八戸市×多くの民家)」		
2011/8/18	大なみ	波重き弥生の海のあとの夜に津 軽竜飛(たつひ)の白雪の空	波が重々しかった三月の海のあとの夜、津軽の竜飛岬の空には 白雪が舞っていた。	◇歌枕「津軽」 ◇竜飛岬		
2011/8/18	大なみ	下北の海女の袂の下燃えを消し し津波の沼の霜枯れ	下北半島の海女の、濡れているはずの袂の下に燃える恋を、津 波は消してしました。半島の沼あたりは、冬の霜枯れとなった。	◇下北半島		
2011/8/18	大なみ	大槌の浪打つ声の夕羽振(ゆふ はふ)り越ゆる千鳥の釜石の空	大きな槌を打つような音で、津波が大槌にやってくる。異変を 知って羽ばたいていった千鳥たちも、やがて波を越えてゆく、釜石	◇岩手県釜石市		
2011/8/18	大なみ	權(かひ)と波とのかたみに越えし大 船渡(おおふなと)それも昔の海 の勝ち闘(どき)	大船渡の沖の海で、舟の權と波とお互いを雄大に越え合って、 漁師が大漁の勝ち闘を上げていた日々。それも今や、津波の前 の昔の話である。	◇岩手県大船渡市		
2011/8/18	大なみ	桜月(あうげつ)の幾巡(いくめぐ) るとも氣仙沼消さむ思ひの胸の 高田は	桜の三月が何度巡っても、消すことができない。氣仙沼や陸前高 田の死者を思う胸の高鳴りを消そうとしても。	◇掛詞「消せん(方言)×氣仙沼」「胸の高 (き)×高田」 ◇宮城県氣仙沼市:エミシ語の「計仙麻(ケセ マ)」に由来か。(『日本三代実録』) ◇岩手県陸前高田市		
2011/8/18	大なみ	やがて降る南三陸北時雨(みな みさんりくきたしぐれ)志津川灣の 袖のかたみに	こうして、地震と津波のあと、南三陸に北時雨が降る中、残された 人々は袖に涙するのであった。志津川灣に流れていった人々の 形見として。	◇対句「南三陸//北時雨」 ◇志津川灣:宮城県		
2011/8/18	大なみ	陸奥(みちのく)もみゆきに慣る 今の世ぞ多賀は名(のみ)の伊達に あるまじ	かつて陸奥と畏れられた地方も、雪に慣れ、天皇の行幸をも受け るようになった今の時代、日本人にとって畏敬すべき自然などな くなったかと思われた。しかし、多賀城とて、伊達に名ばかりの城と して建ったのではなかった。津波を避けつつ、なおかつ内陸の森 林をも浸食せず、大地に調和していた。	◇掛詞「み雪×行幸」 伊達(虚栄×伊達政 宗)」 ◇歌枕「陸奥(みちのく)」:出羽(では)と陸 奥(むつ)。今の東北地方。 ◇宮城県多賀城市		
2011/8/18	大なみ	幻や福なき島と思ふ空にむなしき 塵(ちり)は富岡の色	福島と言いつつ、今やそれも幻、福なき島に仕立て上げ、美し き富岡の景色も奪った、むなしき衆生の業ばかりが岡の上に富 み、塵のような傲慢さで虚空に舞う。	◇対句「福島//福なき島」 ◇福島県双葉郡富岡町		
2011/8/18	大なみ	沖つ国朝の日立の東雲に遠かり がねのなき声を聞く	死者の行く海の彼方の国よ。朝日が昇る日立市の東の空に、遠く 飛びゆく雁の鳴き声を聞く。	◇掛詞「日立ち×日立(市)」		
2011/8/18	大なみ	花さそふ霞ヶ浦の朝風も潮来行 方(いたこなめがた)やがて吹くら ん	桜の花を誘って散らす霞ヶ浦の朝の風も、そのまま潮を含んで来 て潮風となりつつ、行方も知れず、潮来や行方の方角あたりに吹 き続けるだろう。	◇霞ヶ浦、潮来市、行方市:茨城県		
2011/8/18	大なみ	白露の袖おきまよふ小美玉(をみ たま)に弥生ののちの茨をぞ見る	小さな美しい宝石のような白露が袖に置き迷う。だが、小美玉の 沖に迷う、三月の桜ののちの茨の道よ。	◇枕詞「白露の一おく、玉」 ◇掛詞「置き×沖」「小美玉(小さな美しい宝 石:当歌の造語×小美玉市)」		

2011/8/18	大なみ	駒とめて見れば涙をはらふ袖雪の相馬の松川の浦	馬を止めて、ふと我が袖を見れば、大波のあとに、はらうほどの涙。雪が降る相馬の松川の浦よ。	◇「駒(馬)//相馬」 ◇本歌取「駒とめて袖うちはらふ影もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ」(定家) ◇福島県相馬市、松川浦 ◇掛詞「頻波×頻並み」「涙が」しくしく×頻く頻く」 ◇歌枕「宮城野」		
2011/9/4	大なみ	宮城野のそのしきなみのしくしくつつの原のかなしさを聞く	宮城野に次から次へと寄せる波に、この現実の草原の悲哀の涙声を聞き、私も涙する。	◇掛詞「頻波×頻並み」「涙が」しくしく×頻く頻く」 ◇歌枕「宮城野」		
主催: 余情会	歌数:24首 歌人数:4名 自歌数:2首	『江戸川橋恋二帖』(えどがはばしこひにでふ)			評	派生歌など
2011/9/15	即詠	江戸は江戸川橋に寄せて恋を詠むこととされた。 出題者:長満たき 衆議判				
2011/9/15	寄橋恋	秋更けて幾重かさなる月の影江戸川橋を渡る袂に	秋が更け、あなたの気持ちも冷めた今、江戸川橋を渡る私の袂の涙に、幾重にも月の影が宿っております。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇「江戸川橋」:東京都文京区		
2011/9/15	寄橋恋	江戸川のもみぢを袖にせきとめて髪に隠れし橋姫の冬	まるで江戸川の欄に流れ着いた紅葉の色のような紅涙を袖に溜め、寂しく寒たい失態の表情を髪に隠している女のもとにもやって来た、この冬である。	◇参照「もみぢ葉を水の心にまかせれば大井河をやせきとめて見む」(小大君)		
主催: 余情会	歌数:24首 歌人数:3名 自歌数:2首	『八丁堀桜川恋歌合』(はつちやうぼりさくらがはこひうたあはせ)			評	派生歌など
2011/10/2	即詠	江戸は八丁堀桜川に寄せて恋を詠むこととされた。 出題者:長満たき 衆議判				
2011/10/2	寄桜恋	新桜(にひざくら)身の中空の八重咲きを楓(もみぢ)一重に散りて伝へよ	桜川に新しく咲いた桜よ。空いっぱい八重咲きとなった桜の様子を、そして、片想いばかりが桜のように咲いているうわのそらの我が身を、楓川の辺りの紅葉のうちの一枚のように薄っぺらいあの人の心に、ただ伝えて下さい。	◇掛詞「中空(中天×うわのそら)」「一重に×偏に」 ◇対句「桜、八重×楓、一重」 ◇「桜川、楓川」:東京都中央区		
2011/10/2	寄川恋	堀川の深き頼みは桜橋渡らぬ花の春のかげろふ	三十間堀川のように深い私の恋の成就の期待は、無駄でした。恋は、堀にかかる桜橋を渡りきるようには叶わず、春の桜のように咲かず、ただ陽炎のように儂いものでした。	◇参照「三十間堀川、桜橋」:東京都中央区		
主催: 余情会	歌数:87首 歌人数:8名 自歌数:10首	『平成初花女達歌合』(へいせいのはつはなをんなたちうたあはせ)			評	派生歌など
2011/10/3 出題 2011/10/16 判	『若狭守通宗朝臣女子達歌合』(1086)にならい詠むこととされた。 原主催・出題者:藤原通宗 原判者:藤原通俊 出題者:武田あさ多 判者:長満たき・岩崎純一					
#####	春駒	若草の角(つの)ぐむ沢の春駒やあれたれどきに声のみぞ聞く	若草が新芽を出す春の夕暮れ時に、姿は見えずらいが、沢辺の馬が荒々しく啼く声が聞こえる。	◇掛詞「彼(誰時)×荒れ」 ◇参照「立ちはなれ沢べに荒る春駒は」(『後拾遺』)		
#####	桜	空匂ふ桜尽くしにかこちても闇の霞の奥見えぬ影	確かに匂いだけは空に満ちている桜の姿を思い、着物に桜の模様を染めたり、桜尽くしの歌祭文にしたりするが、霞のかかった闇の奥にあって姿は見えない桜であった。	◇参照「桜尽くし」(『賀古教信七墓廻』近松門左衛門 など)		
#####	子規	ほととぎすかしましきほど鳴かめ羽人忍び音(ね)の袖にならひて	ほととぎすの季節となった。羽音も鳴き声も、やかましくはない。ほととぎすの「忍び音」と言うくらいだから、人間が袖に忍び泣く姿に倣っているのだろう。	◇参照「まだ忍び音の頃にて」(『大鏡』)		
#####	水鶏	聞くごとに夢と漬るる心の戸水鶏のたたく夜半のつらさに	夜、水鶏の鳴き声を聞き、あの人に来てくれて玄關の戸を叩いた音だと間違えるたびに、私の恋は夢物語なのだと知り、胸は遣れ	◇参照「積の戸をたたく水鶏のいつはりもまことになりて明る短夜」(契沖)		
#####	萩	もの思ふ秋の心の袖の色夕露かこつ萩の花摺り	物思いに沈む秋の我が心を映す袖の色は、夕露が自らを萩の花摺りにかこつけたような、紅涙の色である。	◇参照「衣手にうつりし花の色かれて袖ほころぶる萩が花摺り」(西行)		
#####	月	忘れよと夏のさらなる月の頃弥生を思ふ心にぞ宣(の)る	三月の桜の美を忘れよと、我が心に言い告げる。もう夏も過ぎたのだから。そして、桜の美の代わりとして申し分ない秋の月の照る頃になったのだから。	◇参照「忘れぬ弥生の空をしたふとて青葉にほふ花の香もなし」(定家)		
#####	鶯	夜に聞く独りなきねの鶯の毛に返すばかりの袖を着せばや	夜、一羽だけで寂しく寝ようとしている鶯の鳴き声が聞こえてきます。袖を返して、恋する相手の雄を夢に見られるよう、彼女の羽毛にも、私が泣きながら返して寝ているような袖を着せてあげま	◇掛詞「鳴き寝×鳴き音×泣き寝×泣き音」 ◇参照「ひとり寝る我にて知りぬ池水につ		
#####	雪	色もなき梢の冬をしたふ風にむなしき塵の空めぐる雪	春夏秋冬の花々の色香もなくなった冬の梢を惜しみ吹く風のうちに、雪は、この俗世のむなしき汚れのように、舞い上がる。	◇縁語「色も無し、空し、塵、空」(仏語)		
#####	恋	脱ぎかけて来ぬ夜あまたの藤衣なれて間遠(まどほ)を埋むる白露	あの人に来てくれるのではないかと思っただけで脱ぎかけた、私の着物。来てくれない毎夜に慣れるにつれて、藤の繊維も古ぼけました。透けて見えるぼろぼろの織り目を埋めるのは、私の涙で	◇掛詞「慣る×襲る」 ◇本歌取「須磨の海人の塩焼き衣の藤衣間遠にしあればいまだ着なれず」(『万葉』)		

#####	祝	松の葉の散り失せぬ数の八百万(やほよろづ)なほ神御衣(かむみそ)も織りて備へよ	常緑の松の葉の数のような、散り失せない八百万の神々が、日本にはいらっしやるのだ。神々に捧げる御衣を、多く織って常備しておけ。	◇枕詞「松の葉の一散り失せぬ」 ◇参照「神御衣織らしめ給ひし時」(『古事記』)		
主催: 園井長光・ 岩崎純一・ 余情会	歌数:400首 歌人数:4名 自歌数:100首	『新詠連久百首和歌』(しんえいけんきうひやくしゆわか)				
2011/11/1 出題 2011/10/31 判		通称『六百番歌合』として名高い『左大将家百首歌合』(1193)にならい詠むこととした。ただし、限局された歌枕や宮廷祭祀を含む「賭射・志賀山越・三月三日・賀茂祭・乞巧奠・広沢池眺望・九月九日・野行幸」は改題した。恋の五十題はそのまま出題した。 原主催・出題者:九条良経 原判者:藤原俊成 出題者:園井長光・岩崎純一 衆議判			評	派生歌など
#####	元日宴	思ふどち千歳の梅を夢見つつさかつきの面に浮かぶ花の香	気心の知れた者どうし、梅の花びらを盃に浮かべ、永遠の梅の色香と友情とを夢見る元日の宴である。	◇参照「さかつきに春の涙をそそぎける昔に似たる旅のまどみに」(式子内親王)		
#####	余寒	宿りあへぬ春告げ鳥や白妙の雪に梢の春は隠れて	春はまだ、真っ白な雪が残る木々の枝のうちに隠れている。雪のせいで、鶯もまだやって来て止まらない。	◇枕詞「白妙の一雪」 ◇掛詞「梢×来ず」		
#####	春水	雪とけて梅の梢をかすめつつにほひに沁める庭の池水	梅の梢に乗っていた雪が解けて水となり、梅の匂いをかすめ取って、池に落ちてゆく。池は、梅の匂いに染められる。	◇参照「くるとあとと見てもめがれぬ池水の花の鏡の春の面影」(『新後拾遺』)		
#####	若草	若草のみどり一つは新室(にひむろ)の窓よりのちの花ぞたのむる	新居の窓から外を眺めてみると、緑の若草が芽生えている。もうすぐ咲く花が楽しみである。	◇枕詞「若草の一新」		
#####	春弓	弓取りのむかし影に日は落ちて春も絶えにしとはの射遣(い)の	昔の弓取りの勇姿は幻となり、正月の射遣しの伝統も永遠に絶えた。夕日が沈み、今年の春も絶えてゆく。	◇参照「弓取りのならひほどあはれにやさしきことはなし」(『平治』)		
#####	野遊	乙女子(をとめご)の花咲く野辺に春かけていつしか交じる鶯の声	春になり、幼い少女たちが花の咲く野原を駆け回って遊ぶ。いつの間にか、鶯も鳴きながら仲間に加わっている。	◇掛詞「掛けて×駆けて」		
#####	雉	冬耐へて雉のみどりの草隠れ声のほろもはや漏らしつつ	冬の寒さを耐えきつた雉が、草の中に頭隠して尻隠さず遊ぶ。ほろろという鳴き声も、早や漏らしている。	◇慣用「草隠れ」「ほろろ」		
#####	雲雀	天飛ぶや軽げに高き雲雀かな霞のうちに声は上がりて	天空高く軽やかに飛び上がる雲雀よ。姿は見えないが、霞の中を上がってゆく声が聞こえることだ。	◇枕詞「天飛ぶや一軽」		
#####	遊糸	いとゆふや心の空にくりかへしなと春かけて深く染みなん	蜘蛛の糸が空に舞うのにも似た陽炎は、なぜ春の間ずっと、重ね重ね心に響き続けるのであろうか。	◇掛詞「心の空×空に繰り返し」「繰り返し(反復×糸をたぐる)」 ◇縁語「糸、繰り返す、張る、掛く」		
#####	春曙	思ひける春はおぼろの月夜とぞ花に霞の衣の暈	春の醍醐味とは、朧月夜だと思っていた。着物のような霞が桜にかかっている明け方の景色を、忘れてはならないのだ。	◇参照「見渡せば山も霞む水無瀬川夕べは秋となに思ひけむ」(後鳥羽院)		
#####	遅日	暮れかねて花のうしろに残る日の空に宿れる夕影の色	暮れかかろうと空に残っている絶妙な夕日が、後ろ側から桜を照らし通す、妖艶な光景。	◇参照「桜咲く遠山鳥のしだり尾のながながし日も飽かぬ色かな」(後鳥羽院)		
#####	春山	梢吹く風は尾の上に分かれつつ花にこまれる筑波山(つくばやま)越(こ)え	我が越えてゆく筑波山には、桜が咲き誇っている。梢を吹き、花びらを乗せた風は、頂上をも越え、四方に別れ、筑波山を桜で包み込んでいく。	◇参照「を筑波も遠つ葦穂も霞むなり嶺越し山越し春や来ぬらむ」(賀茂真淵)		
#####	春庭	盃のくねる流れの人の世に桃のほひのなぐさみの庭	曲水の宴でくねり流れる盃のような紆余曲折の人の世。この庭に咲く桃の花の匂いだけが我が慰みである。	◇参照「桃の花流るる色をしるべとて波にしたがふ春の姿」(定家)		
#####	蛙	蛙(あぜ)渡る蛙(かはづ)の声の夕暮れに歩みなづめる春の暈る	春の夕暮れ時、蛙の鳴き声が響き渡る。帰路の畦道を歩いていると、蛙が横切り、歩みが遅れて難渋することだ。	◇参照「水にすむ蛙の声をきけば」(『古今』「仮名序」)		
#####	残春	うぐひすの弥生の心残りにきとまる梢に花の香もなし	三月の桜が散ったことを心残りに思う鶯が、その枝にとまる。桜の香りは枝に一つも残っていないのであった。	◇参照「木のもととは日数ばかりをにほひにて花も残らぬ春のふるさと」(定家)		
#####	新樹	みどりなる水に袂をひたしつづつる若葉の木々の夏の香	夏の木々の若葉の緑色だけでなく、香りまでも映す川の水に、我が袂を濡してみると、その緑色や香りが袂に移ってくる。	◇本歌取「影ひたす水さへ色ぞみどりなるよものこそ夏の同じ若葉に」(定家)		
#####	夏草	幾とせや花散るごとに夏草のしげきみどりに色奪はれて	春の花々が散っては緑色の草が生い茂る夏がやって来る、という季節の巡りは、いったいこの世に何年続いてきたのであろうか。私の女の色香が年ごとに奪われてゆくようになって、何年目でしょうか。	◇枕詞「夏草の一しげき」 ◇序詞「幾とせや～夏草の」 ◇参照「賤の男が刈りつかねたる夏ぐさの中にまじれる月草の花」(木下幸文)		
#####	夏祭	逃れあへぬ賀茂の斎(いつき)のうきねにてあふひわびしく祭るはの色	決して逃れることのできない、賀茂の斎院の運命。祭る葵の葉の色は、未婚で処女性を捨てずにこの世を捨て、恋人に会うこともない彼女の苦痛嗚咽の色にして、根も浮くような涙のわびしさ、そして、孤独に浮き寝する鴉のようなわびしさである。	◇掛詞「賀茂×鴨」「浮き寝×浮き根×憂き寝×憂き音」「葵×逢ふ日」「葉×羽」 ◇縁語「賀茂、斎、葵、祭る」「鴨、浮き寝、羽」 ◇参照「をちこちに眺めやかかはす鶺鴒舟やみを光のかがり火の影」(定家) 「鶺鴒舟あはれとぞ見るもののふの八十字治川の夕やみの空」(慈円)		
#####	鶺鴒川	鶺鴒舟(うかひぶね)八十神々(やそかみがみ)を拝みつつものふ点(とも)すかがり火の影	八百万の神々に殺生を懺悔しつつ鶺鴒舟を出し、かがり火を灯して狩りをする、男の雄姿。			
#####	夏夜	うたた寝や夢のくゆる蚊遣火(かやりび)のむかし夏陰下(した)けぶるかな	夏の夜の木陰で見るうたた寝の夢のように、ぼんやりとくゆる蚊遣火。下のほうで火が少し煙っているように、私も昔のことを思い出す。	◇枕詞「蚊遣火の一くゆる、けぶる」 ◇掛詞「(昔)懐か(し)×夏陰」		

#####	夏衣	春やきてよよを重ねし花の影夏はひとへに裾をひくかな	春が来た頃には、桜も花びらを何重にも重ねて咲いていた。あなたとの夜々の事も、延べ何枚もの着物を脱いだものだった。今は夏。花びらも一重になった。私の着物も一枚になって、脱ぎもしないその裾を、後ろ髪を引かれながら、引いて歩いています。	◇掛詞「来て×着て」「弁々×夜々」「一重に×偏に」「裾をひく(着物の裾を引く×髪の手を引く)」 ◇縁語「春、弁々、花」「着る、重ね、一重、		
#####	扇	扇紙宿らば彩の月なれど秋より先に仕舞ふ袖の音(ね)	秋の月の影が扇紙に宿ったならどんなに美しいものかと思うが、涼しくなりかけている晩夏には、もう扇を仕舞い込み、秋の月のもとの扇を鳴らす音は幻となるのであった。	◇参照「風かよふ扇に秋のさそはれてまづ手なれぬるねやの月影」(定家)		
#####	夕顔	常木の雨夜今はの常夏に残るしづくの夕顔の影	女の品定めをする雨夜も滅びた今の世の真夏に咲く、大和撫子の花は、夕顔の美顔の面影を宿しつつ、涙のような水滴を残して一日中晴れすぎでいて、暑苦しさで気分もうわのそらになりそうな夏の空に、匂いも涼しげな夕立の雨雲が出てきた。	◇参照「源氏物語 常木」『雨夜談抄』:「常木」「雨夜の品定め」「常夏の女」 ◇参照「かれわたる軒の下草うちしほれすずしくにほふ夕立の空」(定家)		
#####	夕立	晴れ晴れとひねもすあつき上(うは)の空ににほひすずしき夕立の	蟬の羽(は)はやがて朽ちてや秋越えて冬の木のねに閉ぢて果て	◇参照「下もみち一葉つつ散る木の下に秋とおほゆる蟬の声かな」(相模)		
#####	残暑	風薫り靡さやかのよそに照る光も今はなつかしき色	風薫る中、春の臘月でも秋の名月でもない、夏の暑さに照る月の光も、残暑の今は、惜しく思われる壮麗な色である。	◇対句「靡、(春) // さやか、(秋)」 ◇参照「かざしては夏の日影ぞへだて行く秋風いだす月の扇に」(正徹)		
#####	七夕	彦星の秋に限らずあくがれて天の河原に迷ふ織姫	彦星は秋に限らずいつも織姫を思い、織姫も彦星を求めて天の川の岸辺をふらふらとさまよひ歩く。	◇参照「彦星と織女とこよひ逢ふらしも」(『万葉』)		
#####	稲妻	秋の夜やおとなふからにやみ果ててあしたに跡も見えぬ稲妻	秋の夜に突然訪れて突然止み、翌朝に痕跡も残さない稲妻。	◇参照「むばたまのやみをあらはず稲妻も光のほどははかなかりけり」(隆信)		
#####	鶉	鶉鳴く年ふる里の夕暮れに吹き敷く床の秋の下風	鶉が鳴き、年月が経ってゆく故郷の夕暮れ。鶉の寝床にも、女の寝床にも、秋風が吹き渡っている。	◇掛詞「古る(う上二)×古里」「吹き敷く×吹き頻く×敷く床」		
#####	野分	露散らす荒きひるまの野分にて夜は木の葉に影も宿らず	昼間の野分は、木の葉に置いていた露を荒々しく吹き散らして、あっと言う間に葉を乾かすほどであった。今夜の月影を宿すほどの露も残っていない。	◇参照「荻の葉にはかりし風の秋の声やがて野分の露くだくなり」(定家)		
#####	秋雨	月もみぢあかぬ人目を過ぎがてに夕闇やぶる村雨の空	秋の夕闇の空を飾る月と紅葉を飽きずに見ている人の目を暗ませて、にわか雨が降る。通り過ぎませず、その場で降りしきる。	◇参照「村雨の露もまだひぬ積の葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ」(寂蓮)		
#####	秋夕	同じとはまことや里を出て来ればさびしさ見えぬ夕暮れもなし	秋風に吹かれて、雲のような稲穂はなびくけれど、稲刈りが終わり、仮小屋も撤去した今、田んぼ一面にわびしさが残っています。あなたが私に飽きて去っても、私はあなたになびいてしましますが、仮初の恋のあとは、長続きの期待も見えず、わびしい限りです。	◇本歌取「さびしさに宿を立ち出でて眺むればいつこも同じ秋の夕暮れ」(良運)		
#####	秋田	秋風に稲葉の雲はなびくとも仮庵のあとぞ田の面(も)わびしき	旅枕を始めて、幾晩が経ったでしょう。時雨の中、寂しさゆえ、そばの水辺で何度も羽を掻くように、袖の涙を何度もぬぐっておきます。	◇掛詞「秋×飽き」「稲葉×往なば」「仮庵×刈り穂」「田の面×頼み」 ◇慣用「稲葉の雲」		
#####	鴨	旅枕経ぬる幾夜のさびしさは袖の時雨の鴨の羽掻(はねが)き	旅枕を始めて、幾晩が経ったでしょう。時雨の中、寂しさゆえ、そばの水辺で何度も羽を掻くように、袖の涙を何度もぬぐっておきます。	◇慣用「鴨の羽掻き」 ◇参照「旅枕夜半のあはれも百羽掻き鴨立つ野べのあかつきの空」(慈円)		
#####	秋池眺望	夕月(ゆふつき)や鴨の影もうつつ秋の浜辺の潮入の池	秋の浜辺近くの潮入の池には、美しい夕月と飛びゆく鴨の姿とが映り込んでいる。	◇参照「浜離宮庭園」		
#####	蔦	深山木(みやまぎ)に宿る時雨の蔦もみぢ袂の色の人にまがひて	時雨が降る深い山の木々には、紅葉した蔦が絡みついている。紅涙に袂を濡らす木蔭の女と紛らわしい有り様です。	◇参照「深山木に宿りたる蔦の色ぞまだ残りたる」(『源氏物語 宿木』)		
#####	柞	なほ秋の嵐山科柞原(あらしやま)しなははそはら)いつこの川も色に出でたり	秋の京都の紅葉は、嵐山、山科、柞原が美しい。いずれの地を流れる川も、紅葉の葉の色に染まっている。	◇歌枕「嵐山、山科、柞原」 ◇参照「秋深き石田の小野の柞原下葉は草の露や染むらむ」(家隆)		
#####	菊	白露と菊唐草(きくからくさ)の命とはなほからくして乱り織らし	菊の露を飲むと長生きすると伝承に聞か、それでも命とは、かろづて織った菊唐草文様の着物に露が乱れ置くような、儂いものに違いないのである。	◇参照「柳の織物に、よしある唐草を乱り織りたるも」(『源氏物語 玉鬘』)		
#####	秋霜	とけん夜やなほ片敷きにむすぶ霜冬より先に迷ふさむしる	秋だからすぐに解けるだろうと思う霜は、なお一人寝の私の袖に置き迷い、私の涙も凍る。冬より先に、冬のような霜の寝床ができ上がってしまった。	◇縁語「(下紐、袖)、解く、片敷く、結ぶ」 ◇参照「とけて寝ぬ夢路も霜に結ばほれまづ知る秋の片敷きの袖」(定家)		
#####	暮秋	木枯らしにうつろふまでの風の名におへるもみちの紅(くれなゐ)の筆	風は、冬の木枯らしに移りゆくまでの「秋風」という名をまだ背負って、紅葉の色を運んで来て、私の筆を赤く染める。その筆で、「あなたが私に飽きた」という現実にくさく、紅涙に染まった恋文	◇参照「ふみそめて思ひ帰し紅の筆のすさびをいかで見せけむ」(『金葉』)		
#####	落葉	数見えず梢をかる落ち葉舟高瀬いつこに朽ちや果てなん	木々の枝を離れて川面に落ちた無数の枯葉は、小型の高瀬舟のようである。これらの落ち葉舟は、このままでの高瀬に停泊し、朽ち果ててゆくのか。	◇掛詞「離るる×枯るる」 高瀬(高い瀬×高瀬舟) ◇参照「高瀬舟」 「嵐こぎ行落ち葉舟」(浄瑠璃『振袖始』)近		
#####	残菊	白雪の心の裏は色の袖きより先に見ゆるくれなゐ	何の裏もない心を装っても袖に紅涙として現れてしまう私の恋のように、白雪の下には様々な色香の菊たちが咲いているのがうっすらと見えてしまう。「何色の菊ですか。その袖の色は恋の色ですか」とあなたに聞かれる前に。	◇参照「花もかく雪の籬まで見る菊のほにほを袖にまだ残さなむ」(慈円)		
#####	枯野	秋萩の花野こもりし穂は出でてさてはうつろふ冬枯れの床	萩の花咲く野原に籠もっていたスキの穂は出尽した。こうして移ろってゆく冬枯れの野原、そして、私の夜離れの床。	◇掛詞「枯れ×離れ」 ◇本歌取「秋萩の花野のすすき穂には出でず」(『万葉』)		
#####	雲	降るものはむかしをかしき雲にて雪まじらぬも白妙の綾	現に目の前に降っているのは、「趣がある」と昔に書かれた雲であって、だが白雪が混じらない雲も、それはそれで一つの美であ	◇参照「雲はにくけれど、白き雪のまじりて降る、をかし」(『枕草子』「降るものは」)		

#####	鷹狩	穂はつまず鷹狩りせんと来たららし飢ゑて細りし稲のものふ	飢ゑて稲のように痩せ細っても、他人の田の稲穂をつまみ食いせず、自ら鷹狩りをしようと狩場にやって来た、鷹のように崇高な男	◇参照「鷹は飢ゑても穂をつまず」		
#####	冬朝	ひるまでに朝降る冬のはだれ雪若菜の春にあとを残して	昼間に乾くその時まで、朝のうちに降る冬のはだれ雪。芽を張り始めた春の若菜に、雪消えの痕跡を残しつつ	◇掛詞「屋×干る」「春×張る」		
#####	寒松	花ひねる万(よろづ)の野辺の春をよそに色や一つの寒き松かな	万国の野辺に華麗な春の花々を探し回ってひねり採る無礼な老人をよそに、千年万年と色を変えぬ寒松の崇高美よ。	◇参照「寒松一色千年別 野老拈花萬國春」(『臨濟録』)		
#####	椎柴	深山路(みやまち)や椎柴垣(ししばがき)に霰降り遠音(とほど)つらなる玉敷きの末(すゑ)	山深い路に沿って垣根のように群がりそびえる椎の木々に、霰が降り、遠くまでばらばらと続く音は、宝石を散りばめたような情景である。	◇本歌取「深山辺を夕越え来れば椎柴のうれ葉につたふ玉敷かな」(家房)		
#####	衾	束の間の藁敷く夜半ぞ衾(ふすま)なき月ひきかくる雪の上かな	旅の夜の束の間、藁を夜具の代わりに雪の上に敷いて横になったが、冷たすぎて臥すひまもない。藁の布団に引き入れるのは、女でもなく、晩鐘でもなく、月の光であった。	◇掛詞「束の間×(藁の)束」「衾×臥す間」 ◇縁語「束、藁、敷く」 ◇本歌取「ひきかくる間の 衾のへだてにも響きは変はる鐘の音かな」(定家)		
#####	仏名	暁や三世(みよ)の仏は夢ばかりうつつに聞かぬは露の昨夜(こそ)の名	明け方に目覚めてみると、三世の仏を見ていたのは、ただ夢の中の出来事なのだ。現実には聞かぬのは、昨夜から続く、諸仏の名号を空しく唱える人間の声のみである。	◇「三世の仏、露」: 仏語 ◇「三世の仏もいかに聞かぬ給らむ」(『紫式部日記』)		
2011/11/8	初恋	時雨降るもみちの色の初入(はつしほ)に見せし袖は風やな吹きそ	時雨が降って紅葉の色が袖に染み込み始めたように、あなたを見初めて紅涙に色づき始めた私の袖に、秋風が吹きませんように。あなたが私に飽きませんように。	◇掛詞「初め×染め」「(秋)風×(飽き)」 ◇序詞「時雨～初入に」「見せし」と「(秋)」を連(く)		
2011/11/8	忍恋	下思(したも)ひの忍ぶうちに小初瀬(をはつせ)や尾の上(へ)に告げて絶ゆる鐘の音	私が秘かに恋を忍んでいるうちに、初瀬山の頂では世の男女の逢瀬を告げる晩鐘の音が響きたのでした。	◇掛詞「初×果つ」 ◇参照「年も経ぬ祈る契りは初瀬山尾の上の鐘のよその夕暮れ」(定家)		
2011/11/8	聞恋	ひとり聞く小雪の間より梅が枝の知らぬ袂に夜半の移り香	もうすぐ解けてなくなる雪のような私は、独りで噂に聞いております。あなたは、雪の間を破って咲き出てきた梅の花の香りのような、他の女の香りを聞いていると。どんな香りか、私の袂には聞こえぬ私にどれほど恋しても甲斐はなく、あなたの気持ちは遠くまで、一目お会いする機会もない日々です。貝一つ、海藻一枚もない遠浅の海岸に、白波が寄せは返ります。	◇掛詞「聞く(承知する×吟味する)」		
2011/11/8	見恋	遠浅のかひなき浜に打ち寄せてみるめも添へず返る白波	あの人のお訪れがなくなった毎夜、あの人を叩く音に代わって、嵐の音だけを聞きながら、冬の雪も春の桜も散る季節が過ぎてゆきました。	◇掛詞「(あなたの心が)遠浅×遠浅(の海)」 ◇「貝×甲斐」「海松藻×見る目」		
2011/11/8	尋恋	おとなひの夜ごとあらしの声にのみ雪も桜も散るは過ぎにき	あの人のお訪れがなくなった毎夜、あの人を叩く音に代わって、嵐の音だけを聞きながら、冬の雪も春の桜も散る季節が過ぎてゆきました。	◇掛詞「嵐×有らじ」 ◇参照「面影はをしへし宿に先立ちてこたへぬ風の松に吹く声」(定家)		
2011/11/8	祈恋	祈るとはくれぬあ色の枕とや露なき秋を知らぬ下草	恋の成就を祈るとは、紅色の枕のことなので。私は、お慕い申し上げる殿方の飽き心に涙を流さない我が身を知りません。ここに生えている草たちも、露のない秋をきつと知らないでしょう。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇参照「紅の初花染めの 色深く思ひし心われ忘れぬや」(『古今』)		
2011/11/8	契恋	かこつけし千歳の契りつれなくてまつとは人の言葉なりけり	松の千歳のように永久に結ばれましょと約束したことを今さら思い出しても、あの人はずれなばかりです。もう一度、約束のお言葉をお待ちしております。	◇掛詞「松×待つ」 ◇参照「かくのみにありけるものを妹もわれも千歳のごとく盡みたりけり」(家持)		
2011/11/8	待恋	幾とせを松が浦島うら枯れし身の浜荻の下ふし折れ	あなたを何年待ったことでしょうか。私が身は、梢の先のほうから枯れ、やがて節々で折れてゆく、松が浜の浜荻のようです。	◇掛詞「松が浦島×待つ」 ◇序詞「幾とせを松が浦島→うら枯れし」		
2011/11/8	遇恋	濡れそぼつ雨夜の星になれにけり晴れ衣々(きぬぎぬ)の夜半をあひ見て	雨雲で見えない星にも慣れました。雨と涙に濡れそぼつ私の袖にも慣れました。よれよれに古びたこの袖が、あなたとの夜の逢瀬を終えた翌朝の晴れ着になったとしても。	◇掛詞「慣る×寝る」「衣々×後朝」 ◇逢ひ×相		
2011/11/8	別恋	花過ぎて春と袂の忘れ霜明日(あす)よりかをる別れ路の風	桜が終わり、八十八夜の忘れ霜が降りて春と別れる頃、あなたともこの路地でお別れする今日の日です。明日から薫り始める夏の風も空しいことでしょう。	◇参照「別れ路のありけるものを逢坂の関を何しにいそぎ越えけん」(經家)		
2011/11/8	顕恋	昔より問はる色もさらぬ顔(がほ)いとどあらはの我が身比べて	「恋しているのですか」と問われるほどの赤面は、昔より歌に詠まれましたが、私の顔は寝られるほどの赤面ではございません。それより、私の体の赤いほてり具合があなたに知られるのではないかと、心を砕いております。	◇参照「忍ぶれど色に出でにけりわが恋は物や思ふと人の問ふまで」(平兼盛) ◇「さらぬ顔(がほ)」		
2011/11/8	稀恋	また切らん思へどやめぬまれ人の長きあひだに髪も伸びては	めったにあなたが来なくなってから、私の髪のように長い月日が経った。あなたとの縁を切り、髪をばつさり切つて尼になろうと思うけれど、その度に思い直してあなたを待ち、また何日が経つと、髪を切ろうかと思う。	◇縁語「切る、長し、髪、伸び」		
2011/11/8	絶恋	同じくは片恋ひしてや絶え果てん玉の緒よりはもろき仲の夜	どうせ叶わないなら、思いきり片思いして死に果てます。切れて玉が飛び散るような弱い紐よりもっともろい私の命、宵間のようなあなたとの仲だと、分かりましたから。	◇掛詞「仲の夜×中の世(世の中)」 ◇参照「玉の緒よ絶えなば絶えね長らへば忍ぶることの弱りもぞする」(式子内親王)		
2011/11/8	怨恋	黒髪のかかるかたみは怨みにて人の命ぞさても恋しき	まるで会えなかった月日の形見であるかのように伸びた、ほきほきの黒髪が掛かっている私のこの体は、怨念に震えておりますけれど、それでも呪い殺すには忍びなく、あの人を命が恋しいで	◇掛詞「掛かる×斯かる」「形見×肩身」		
2011/11/8	旧恋	見せ果てし昔の涙水無瀬川(やむ)とはあだの下に流れて	昔、別れ際にあなたに涙を全てお見せしたと思っておりました。今は、表向きは泣かずして生活しておりますが、やんだとは口先ばかりでして、枯れた川底の下を流れる水無瀬川のように、胸の奥を	◇枕詞「水無瀬川一下」 ◇歌枕「水無瀬川」		
2011/11/9	暁恋	よにならひなほ飽かぬ間の暁にさらばの露を散らす鐘の音	世間並みに生きてあなたと出会い、世の女性のまね事をして夜を覚えたのに、まだ恋というものに飽きない間に暁の空が明け、さようならの涙を鐘の音の響きが散らす朝がやって来ました。	◇掛詞「世×夜」 ◇慣用「飽かぬ別れ」		

2011/11/9	朝恋	夕べ思ふあしたの空の月ごとに かきても眉はまたや濡るを	ひと月に一度、三日月の出る前夜に思う。翌朝、三日月のような 綺麗な眉を眉墨で書いても、またあなたが来ない悲しみの涙で濡 れ、崩れるのだからと。	◇参照 「掻き乱す寝たれ髪の間墨もうつり にけりな小夜の手枕」(『風雅』)	
2011/11/9	昼恋	夜もすがら松ぞ浮きけるひるねさ へをむ日影にかわくまもなし	夜通しあの人を待ち、昼間も昼寝を惜しんで、松の根が浮く波の ような涙を流しています。日光が当たって我が体が乾くのが惜し いというくらいに。	◇掛詞 「松×待つ」「昼寝×干る根」 ◇縁語 「松、浮く、干る、根、乾く」	
2011/11/9	夕恋	覚ほゆるたそかれどきの面影を 知らぬ道辺(みちべ)の夕顔に見 き	見知らぬ地の道を旅する黄昏時、見覚えのある女に出会った。か つての我が恋人の面影を宿す女。道沿いには、女によく似た夕顔 の花が咲いていた。	◇参照 「源氏物語」「夕顔」	
2011/11/9	夜恋	秋づきぬ衾は夜の錦にてせくもせ かぬも見る色はなし	秋らしい季節となった。あなたは私に飽きた。私の寝巻にも、夜具 にも、寝室の襖にも、暗闇で見えませんが、無駄にきらびやかな 紅涙が飛び散っております。色と言いましても、涙を我慢してもし なくても、見るべき私の色香はもうありませんけれど。	◇掛詞 「秋×飽き」「衾×襖」 ◇慣用 「夜の錦」	
2011/11/9	老恋	雪降りて今は思へば若草や別れ しまの面影ぞ立つ	雪が降る今、春に若草の芽生えを見て以来、夏秋を過ごすにつ れて春の初々しい若草と別れてきた一年の記憶が甦る。年老い た今、別れた時のままのかつての貴女の面影が甦る。	◇掛詞 「降り×古り」「若草(若い草×女)」 ◇参照 「暁にあらぬ別れも今はとて我が世 ふくればそふ思ひかな」(定家)	
2011/11/9	幼恋	帰るさの人恋ふる身の初時雨あ はれなさげに袖は髪(な)れつつ	他の女性の元から帰ってゆく男性を見て、初時雨のように初めて 恋に涙しました。ああ、このしみじみとした情こそ、袖が恋の涙に 濡れ慣れて、しなびてゆく始めなのですね。	◇掛詞 「慣れ×髪れ」 ◇参照 「帰るさのもとや人の眺むらん待 つ夜ながらの有明の月」(定家)	
2011/11/9	遠恋	幾峰を越えたづねても雲鳥の綾 (あや)隠れぬる面影ぞ飛ぶ	いくつもの山の峰を越えて貴女を訪ね歩いて、辿り着けず、貴 女は雲の中を隠れて飛ぶ美しい鳥のように、幻の面影だけを私 に見せるのですね。	◇枕詞 「雲鳥の一あや」 ◇参照 「夕暮れは思ひ乱れて雲鳥のあやに 恋しき人の面影」(『風雅』)	
2011/11/9	近恋	行き違ひ梅が香うつる袖の間に 心の春をえも告げやらず	あの人とすれ違い、お互いの袖の梅の香りは移り合いましたが、 私の恋心に春は来ませんでした。	◇掛詞 「春×張る」 ◇参照 「梅が枝の末越す中の垣根より思ふ 心や色に見えまし」(寂蓮)	
2011/11/9	旅恋	たび重ねもの思ふ路の草枕ねに や涙のあと残しつつ	何度もあなたを追って旅を重ね、思い悩んで道端に草枕する。 草の根元にまで、すすり泣いて垂れた涙の痕を残して。	◇掛詞 「旅×度」「音にや泣く」×寝に×根 に」	
#####	寄月恋	桂川影は水のものうつり来し別る る橋の上の袂に	京都桂川の水面に、月が映っています。そして、橋の上であなた と別れようとしている私の袂にも、映っています。	◇歌枕 「桂川」 ◇参照 「桂川月の光に水まさり秋の夜深く なりにけるかな」(『歌枕名寄』)	
#####	寄雲恋	定まらずなほ白雲の行方とてえこ そ峰越せ空のそなたに	我が恋の行方は定まらず、頼りなき白雲のようで、好きな女に会 うこともできないでいるが、この恋を乗せた白雲よ、山の頂を越 え、空の向こうにいる女に届けよ。	◇掛詞 「えこそ見ね×えこそ峰越せ」 ◇参照 「君がりとうきぬる心まよふらむ雲は 幾重ぞ空の通ひ路」(良経)	
#####	寄風恋	こがらしのこすゑの身とは知らざ りき薫りし頃の深草の風	木枯らしに吹かれた梢のような我が身となるとは知りませんでした。 深草の草原に夏の風が薫り、恋も叶って、あなたが私の元に 来てくれた頃は。	◇掛詞 「梢×来ず」「深草(深い草×歌枕)」 ◇歌枕 「深草」	
#####	寄雨恋	忘れずよ別る袖の雨の前に降 らじのけしきあたにやみしを	忘れません。あなたと別れる日は雨模様ではないでしょうという期 待が無駄に終わったことを。泣くまいと準備していた心が的外れ に終わったことを。	◇縁語 「雨、降る、景色、やむ」 ◇参照 「夜の軒の雲を数へてもなほあまり ぬる袖の雨かな」(良経)	
#####	寄煙恋	思ひ起こし上に燃えても尽くるよ り下の煙のくゆらかさばや	火を起こすすぎて燃え尽きるより、煙のようにくゆりたい。あなたに 恋しすぎて燃え尽きるより、秘かに思いを寄せられるようになりた い。	◇掛詞 「(思)ひ×火」 ◇縁語 「火、起こす、燃ゆ、尽く、煙、くゆら かす」 ◇対句 「火、上、燃ゆ//煙、下、くゆらかす」	
#####	寄山恋	夢ばかり逢坂山の杉むらに花は あらしの面影の色	夢であの人に会えた夜は、逢坂山の満開の桜のように嬉しいけ れど、夢の時間は嵐のように過ぎて、桜は散り、杉群ばかりが残 り、結局、あの方は面影のままなのでした。	◇掛詞 「逢坂山×逢ふ」「杉×過ぎ」「嵐× 有らじ」 ◇歌枕 「逢坂山」 ◇参照 「逢坂や梢の花を吹くからに嵐ぞか ずむ関の杉むら」(宮内卿)	
#####	寄海恋	波枕逢ふ瀬戸内の夢覚めて外吹 く風のあだの潮待ち	船中の枕で見たあの人との逢瀬の夢も覚めた。再び、航海前の 船の潮待ちのように、現実の逢瀬の機会を待つけれど、恋を告げ る潮風は、この瀬戸内海のどこかそこに吹くばかり。	◇参照 「わたつ海の波のあなたに人はすむ 心あらん風を通ひ路」(慈円)	
#####	寄河恋	たのめ来し人の心は飛鳥川明日 (あす)の淵瀬(ふちせ)を契るな かの世	あてにさせてきたあなたの心は、色あせたのです。飛鳥川の淵 と瀬を歌った古歌のように、この世は移ろいやすいということ、明 日からも恋の成就はないということだけが、あなたとの約束だった 来ないで下さいなどと言うわけもなく、来て下さいとだけ言ってあ なたを待ち、せき止められないほどの涙で袖を濡らしていたのに、 勿来の関を開けるように玄関の戸を開けておいても、あなたは来 てくれず、恋文さえ届かず、夜は明けたのです。	◇本歌取 「世の中は何か常なる飛鳥川昨日 の淵ぞ今日は瀬になる」(『古今』) ◇序詞 「～飛鳥川一明日」	
#####	寄関恋	なこそとは言はで袖のみせくもの をあけても人のふみも通はず	あなたを待ち、せき止められないほどの涙で袖を濡らしていたのに、 勿来の関を開けるように玄関の戸を開けておいても、あなたは来 てくれず、恋文さえ届かず、夜は明けたのです。	◇掛詞 「なこそ(な来そ×勿来の関)開け ×明け」「踏み×文」 ◇縁語 「勿来、せく、開く、通ふ」	
#####	寄橋恋	きぬぎぬの面影橋の袖振りに朝 日さびしきいにしへの夢	面影橋で別れる後朝、袖を振り合う二人に、逢瀬が遠い昔になっ てゆくことを告げる寂しい朝日が照るのであった。	◇掛詞 「後朝×衣々」面影×面影橋」 ◇「面影橋」:東京都新宿区	
#####	寄草恋	おしなべて聞こゆる草のゆかりと は我が恋ならでよその武蔵野	人の縁故を表すものとして、古来あまねく「草の縁」と聞くものは、 私の恋にとっては例外で、遠い武蔵野の風の草たちのごとだった	◇歌枕 「武蔵野」 ◇慣用 「草の縁」	

#####	寄木恋	みになるは秋風ばかり椎本(しひがもと)陰敷く床は宇治川の袖	この椎の木に秋風が吹くばかりで、実が生らないように、私の身に訪れるのは、あなたの飽き心。木の元に眠る私の袖は、『源氏物語』の「椎本」の女たちの袖と同じく、宇治川のように涙で濡れています。	◇掛詞「実(に)生る×身(に)なる」「秋×飽き」 「宇治川×憂し」 ◇縁語「実、生る、秋、椎」 ◇参照『源氏物語』『椎本』:立ち寄りむ陰とたのみし椎本むなしき床になりにけるかな		
#####	寄鳥恋	黒髪(くろかみ)の夕波(ゆは)千鳥(ちどり)さやぎつつ上毛(かみ)の陰(かげ)に音(ね)をのみぞなく	夕波の上に群れる千鳥たちは、私の失恋の黒髪のようにさやさやと飛び、髪(かみ)の陰(かげ)で泣く私(わたし)のように、羽毛(うぶ)に隠れながら鳴いている年月(としづき)が経(た)って、音(ね)を懐(なつか)しみ、貴女(あなた)と過(と)ごした丘(かみ)にやって来た。狐(きつね)に化(ま)けた貴女(あなた)を見つけた。貴女(あなた)の魂(たま)は、狐火(きつねび)となって、「あなたの恋人(こゝろ)だった私(わたし)です」と答(こた)えてくれた。	◇参照「淡海(たんかい)の海(うみ)夕波(ゆは)千鳥(ちどり)汝(な)が鳴(な)げば」(『万葉』) ◇縁語「あくがる、火、たま」 ◇参照「はつと消(き)えては狐火(きつねび)の」(『会稽山』近松)		
#####	寄獸恋	年(とし)を経て昔(むかし)あくがれ狐塚(きつねづか)思(おも)ひのたまも姫(ひめ)とこたへて	あの人(ひと)を待つ間(ま)、私の体(てい)は、隣(となり)で一緒に鳴(な)っている鈴虫(すずむし)以上のわびしさに泣(な)き、袖(そで)を涙(なみだ)で濡(ぬ)らしてあります。	◇掛詞「肩身(かたみ)に×互(たが)に」「泣(な)く×鳴(な)く」		
#####	寄虫恋	待つ袖(そで)のあひだかたみに鈴虫(すずむし)の声(こゑ)も及(およ)ばぬわびしさになく	男(おとこ)を追(お)って尼(に)になった女(メ)の本物(ほんもの)の恋心(こゝろ)の叫(な)びを思(おも)わせて、山(やま)深くから聞(き)こえてくる横笛(よこふエ)の音(ね)を、滝(たき)の落(お)ちしきる音(ね)が空(そら)しく掻(か)き消(き)す。	◇参照『源氏物語 横笛』:「横笛(よこふエ)の調べはことにかはらぬをむなしくなりし音(ね)こそつきせぬ」 『平家物語』:横笛		
#####	寄琴恋	琴(こと)の音(ね)はなれし昔(むかし)の枕(まくら)にてよその弾(ひ)く手(て)のもとにうつり	美しい琴(こと)の音(ね)は、昔(むかし)あなたと親(お)しかった頃(ころ)の枕(まくら)の上(うへ)で聞(き)いたものになり果(な)って、その琴(こと)は、今はよその女性(おんな)の方(かた)の手(て)で弾(ひ)かれてい	◇参照「昔聞(むかしき)く君(きみ)が手慣(てな)れの琴(こと)ならば夢(ゆめ)に知られて音(ね)をも立てまし」(定家)		
#####	寄絵恋	まぼろしを筆(ふで)のすさびにかきやりてさても昔(むかし)の髪(かみ)に似(に)るあと	今(いま)や幻(まぼろし)の貴女(あなた)の肖像(しょうざう)を手慰(てなぐさ)みに描(か)いて、似(に)ていないと自嘲(じやく)してみても、髪(かみ)を描(か)く感(かん)覚(かく)が、現実(げんじつ)の髪(かみ)を掻(か)き分(わ)けた感(かん)覚(かく)に似(に)ている	◇掛詞「描(か)きやりて×掻(か)きやりて」「紙(かみ)×髪(かみ)」 ◇縁語「筆、描く、紙」		
#####	寄衣恋	しのめのめあけて迷(まよ)ひし衣箱(ころもばこ)朝日(あさひ)にかこつよそほひ	あなたが来(き)ない夜(よ)が明(あ)けて、戸惑(戸)いながら開(あ)ける衣箱(ころもばこ)。私の装(ま)いの美(うつく)しさ、あなたにではなく、朝日(あさひ)の光(ひかり)の美(うつく)しさにかこつけること	◇掛詞「明(あ)けて×開(あ)けて」		
#####	寄席恋	霜(しも)おかす風(かぜ)に耐(た)へつるさむしろの上(うへ)迷(まよ)ふ身(み)の声(こゑ)の冬(ふゆ)枯(か)れ	霜(しも)が降(ふ)りそうになっても強風(きやうふう)のために霜(しも)が置(お)かず耐(た)えきつた寝床(ねど)の蓆(し)のように、涙(なみだ)を流(なが)さず耐(た)えて参(ま)りましたが、かえって蓆(し)の上(うへ)の我(わが)が身(み)は、冬(ふゆ)枯(か)れのように声(こゑ)枯(か)れるほど、泣(な)くようになりま	◇参照「忘れ(わ)ずはなれし袖(そで)もよこほらん寝ぬ夜(ねぬよ)の床(とこ)の霜(しも)のさむしろ」(定家)		
#####	寄遊女恋	巫女(まじな)の身(み)や神楽(かみ)の袖(そで)はなれきつつ初色(はついろ)里(はついろざと)の夜半(よる)の舞姫(まいひめ)	今(いま)まで巫女(まじな)の身(み)として、神楽(かみ)を舞(ま)い歌(うた)い、巫女(まじな)装束(まじな)をよれよれになるまで着慣(き)れてきた女(メ)。装束(まじな)を着替(か)え、初(はつ)めて色里(いろざと)に身(み)を置(お)いた彼女(かのんな)は、今日(けふ)より夜(よ)に舞(ま)う姫(ひめ)となつたのであつた。	◇掛詞「慣(な)れ×褻(せ)れ」「着(き)つつ×来(き)つつ」		
#####	寄傀儡恋	面影(おもかげ)のむかしにかはる手(て)くぐつを連れてさびしき更級(さらぎ)の月(つき)	昔(むかし)の恋人(こゝろ)の面影(おもかげ)を残(のこ)す操(くわ)り人形(にんぎやう)を運(た)れて芸(う)を売(う)る女(メ)になつてみても、あの人(ひと)の心(こゝろ)を操(くわ)れるわけでもなく、『更級(さらぎ)日記(にっぴ)』の作者(そ)の女(メ)と同じ身(み)の私(わたし)は、更級(さらぎ)の名月(なづき)を寂(さび)しく見(み)るばかりです。	◇参照『更級日記』		
#####	寄海人恋	荒磯(あらいそ)や底(そこ)の心(こゝろ)はかひもなしみづから袖(そで)にいさるかづき女(メ)	貝(かい)のない荒磯(あらいそ)の海岸(かいがん)の底(そこ)のように、海女(あま)の激(あ)いしい恋心(こゝろ)は甲斐(かい)もなく、海(うみ)のようになつた涙(なみだ)の袖(そで)に潜(ひそ)んで幻(まぼろし)の貝(かい)をいさるかのような泣(な)き姿(すがた)である。	◇掛詞「甲斐(かい)×貝(かい)」「自(みづか)ら×水(みづ)」 ◇縁語「荒磯、底、貝、水、いさる、かづき女」		
#####	寄樵人恋	山人(さんじん)のなげきの色(いろ)ぞ下燃(したも)ゆるこりては上に立つ炎(えん)かな	木こりが火(か)に投(な)げ入れた木(き)の色(いろ)のように、私の恋(こゝろ)の嘆(なげ)きは、始め(はじめ)は赤(あか)くすぶっていました。そのうち、木こりが何(なん)度も木(き)を切(き)るようになり、何(なん)度(たび)恋(こゝろ)に燃(も)れても、炎(えん)のごとく燃(も)え上(あ)がるようになりました。	◇掛詞「投(な)げ木(き)×嘆(なげ)き」「樵(せう)る×燃(も)る」 ◇縁語「山人、木、燃ゆ、樵、立つ、炎」 ◇対句「嘆(なげ)き、下(した)、燃(も)ゆ/炎(えん)、上(う)、立つ」		
#####	寄商人恋	梅(うめ)の頃(ころ)仄(ひそ)見(み)し去年(こぞ)の客人(きやくじん)(まらうと)に残(のこ)る市女(いちめ)の行き摺(すり)りの夢(ゆめ)	今年(ことし)も、梅(うめ)の花(はな)が咲(さ)く春(はる)の市場(いちば)を、女(メ)が昨(きの)年(とし)見(み)初(はつ)めた客(きやく)が訪(た)れた。女(メ)は物(もの)を売(う)るのが精(せい)一杯(いっぱい)で、あとに残(のこ)るものは、少し触(ふ)れ合(あ)つたお互(たが)いの袖(そで)の梅(うめ)の香(か)りばかり。恋(こゝろ)の成(な)就(じゆ)など夢(ゆめ)の夢(ゆめ)であつ	◇掛詞「行き摺(すり)り(すれ違(ちが)い×かりそめ)」		
主催: 余情会	歌数:21首 歌人数:7名 自歌数:3首	【王朝女流和歌唱和】(わうてうぢよりわかしやうわ)				
2011/11/6より出題	王朝期の女流歌人の歌に唱和することとされた。 出題者:長満(ながみち)たき・戸井(とゐ)留子(りゅうこ)・袴(はかま)の子(こ)衆議判			評	派生歌など	
2011/11/6	唱和	世(よ)は情(なさけ)け旅(たび)もさかづきまどるせんされど庵(いほ)の道(みち)連れもなし	この世(よ)には人情(にんじやう)が必要(ひつやう)だ、旅(たび)においても同行者(どうぎやう)と盃(さかづき)の宴(うたげ)をしよう、と思(おも)っても、この一人旅(ひとりたび)の飯(いひ)小屋(こや)には、同行者(どうぎやう)などいないのだ。	◇本歌取「さかづきに春(はる)の涙(なみだ)をそそぎける昔(むかし)に似(に)たる旅(たび)のまどろに」(式子内親王)		◆さかづきにたまる涙(なみだ)の真澄(まこと)鏡(かがみ)つる昔(むかし)の月の面影(おもかげ)(長満(ながみち)たき) ◆そそぎにき春(はる)の契(せき)りは昔(むかし)にて秋(あき)の袂(たもと)にあだの涙(なみだ)を(戸井(とゐ)留子(りゅうこ)) ◆面影(おもかげ)の腕(うで)のまどろの中(なか)の身(み)は今の涙(なみだ)の春(はる)のさかづき(袴(はかま)の子(こ)) ◆さかづきに映(うつ)るおぼろの昔(むかし)までかへらば氷(こ)かへらぬも今(いま)(武田(たけだ)あさゑ) ◆さかづきの涙(なみだ)に花(はな)を浮(う)かべにきひとよ添(よ)へるは面影(おもかげ)の色(いろ)(青柳(あやな)香織(かおり)) ◆さかづきに今(いま)は身(み)を知る雨(あめ)落ちてあふれて夢(ゆめ)の淫橋(よひな)のき(伊田(い)田(た)小春(こはる))

#####	唱和	白雪やもの深き冬の葉隠れに沈むみどりの夜半の若草	雪深い銀世界の冬の夜、まだ春の草が萌え出るわけもなく、若葉は雪の底に隠れている。	◇本歌取 「うすくき野辺のみどりの若草にあとまで見ゆる雪のむら消え」(宮内卿)		◆若草にはたれ雪のみ薄重ねあと白梅よその袖の香(長満たき) ◆暮れかかる雪の夕日にあと見えて光るみどりの野辺の若草(戸井留子) ◆うすくき春の霞の立ち消えにみどり重なる野辺の若草(袴子の子) ◆するせぬを白雪のうちにむら消えてみどり一つになりける恋(武田あさゑ) ◆黒髪にとくる白雪いにしへの若草色のむら消えのあと(青柳香織) ◆若草と言はれし頃のむら消えに同じ乙女のほの赤き類(伊田小春)
#####	唱和	佐保姫や着るか着ぬかのおぼろ染め闇を霞の春の月影	服を着るのか着ないのか分からない女のように、霞は、春の闇の中、月影をぼかしながら朧にかかっている。	◇本歌取 「浅みどり花もひとつに霞みつつおぼろに見ゆる春の夜の月」(菅原孝標女)		◆わが恋は霞の奥の浅みどり見てもおぼろの月陰の花(長満たき) ◆花さらに人の心もあさ霞夜もおぼろの春の月影(戸井留子) ◆春の花おぼろ一つに霞みつつ闇と光を分かぬ月影(袴子の子) ◆忘れよ花は霞に隠れつつ月も心も浅みどりは(武田あさゑ) ◆黒髪に薄くれなゐの初恋は頼み浅黄の朧月かな(青柳香織) ◆冬を経て春と思へど浅みどりけしきおぼろに濃き花もなし(伊田小春)
主催: 岩崎純一	歌数:150首 歌人数:1名 自歌数:150	『雪月花 拙唱交響 岩崎純一愚作選』 (せつげつくわ せつしやうかうきやう いはさきじゆんいちぐさくせん)				
2011/12/1~12/31		『雪月花 絶唱交響 良経・家隆・定家名作選』(塚本邦雄、昭和51年、読売新聞社)に掲載されている九条良経・藤原家隆・藤原定家の名歌各50首を左方、これら各歌に類似するコンセプト・情景・歌語が詠まれている過去の自詠歌を右方に置き、三歌人と相対する一つの仮想歌合ないし三歌人へのオマージュとした。 塚本邦雄撰 和歌:岩崎純一			評	派生歌など
	◆解説ブログ記事	左記に解説を掲載。				
	◆PDFファイル	左記に全歌を掲載。				
#####	雪月花 絶唱交響	天(あま)つ空身を浮雲のむなしきよ池の心にうつる葉桜	上は、天空に浮かぶ雲のようにつらく空しい我が身よ。下には、池の底に映る葉桜のような我が身よ。	◇掛詞「身を憂き×浮雲」 ◇本歌取「散る花も世を浮雲となりにけりむなしき空をうつす池水」(以下50首は良経作)		
#####	雪月花 絶唱交響	春風は深山さびしき梢(こずゑ) 経て籠(ふもと)の花も散り乱れつ	春風は、深い山々の桜の枝に吹き、籠の枝にも吹き、花を寂しく散り乱す。	◇本歌取「明方の深山の春の風さびて心くだけと散る桜かな」		
#####	雪月花 絶唱交響	黒髪の荻ほめかす夕暮や露の袂にかかる三日月	夕暮れ時、女の黒髪に似た荻の穂がなびき、女の眉のような三日月が涙の袖に映っている。	◇掛詞「(黒髪が、露が、三日月が)かかる」 ◇本歌取「三日月の秋ほめかす夕暮は心に荻の風ぞこたふる」		
#####	雪月花 絶唱交響	笹枕も寝られずの月宿り忘るべからぬ旅の景色に	笹原に横たわっても、少しも寝られない中、月が宿っている。この旅先の忘れられぬ景色の美への感動の涙に。	◇本歌取「月宿る野路の旅寝の笹枕いつ忘るべき夜半の景色ぞ」		
#####	雪月花 絶唱交響	秋の夜の心なぐさに風更けて松葉のひまに見ゆる月影	秋の夜は更け、風が松の葉を揺らす。その度に、あなたを待つ私の心を慰めるかのように、葉の隙間から月が見える。	◇掛詞「秋×飽き」 「松×待つ」 ◇本歌取「月だにもなぐさめがたき秋の夜の心も知らぬ松の風かな」		
#####	雪月花 絶唱交響	かへる雁おとづれもせずかれし人空のみ見ゆる春の曙	帰ってゆく雁。ろくに訪れもせず、離れ離れになった恋人。空にばかり見える、明るい春の曙。	◇本歌取「ただ今ぞかへると告げてゆく雁を心におくる春の曙」		
#####	雪月花 絶唱交響	火車(ほぐし)よりこの世のわが身あくがれむのちのあはれに思ひ	私は、あの人は今もどこかで猫に使っている火車から、松明の炎となって消え去り、この世を去りたい。死後の世に恋の成就を期	◇本歌取「のちの世をこの世に見るぞあはれるおのが火車を待つにつけても」		
#####	雪月花 絶唱交響	志賀の浦残る氷のさざ波に人は梢の松風の声	志賀の浦の海岸に残る氷に、さざ波が寄せて来ていた頃の面影が見える。そのようにはあなたは来てくれず、ただ松に吹く風の音だけが訪れる。	◇歌枕「志賀の浦」 ◇掛詞「梢×来ず」 「松×待つ」 ◇本歌取「志賀の浦梢にかよふ松風は水に残るさざ波の声」		
#####	雪月花 絶唱交響	恋絶えぬこなたの空に日は落ちてそなたに明けぬとはの東雲	恋は絶えました。こちらの空には夕日が沈んでおります。明日からもそちらの空に夜は明けるでしょうけれど、私はあなたの心を開けることはできませんでした。	◇本歌取「恋ひ死なむ身ぞといひしを忘れずばこなたの空の雲をだに見よ」		
#####	雪月花 絶唱交響	入相の鐘の鳴尾の松が枝を身の夜な夜なに過ぐる音かな	恋人たちの逢瀬を告げる晩鐘が鳴り、鳴尾の松の枝を駆け抜ける音を聞きながら、あなたを毎晩待つ中、年月も駆け抜けてゆき	◇本歌取「友と見よ鳴尾に立てる一つ松夜な夜なわれもさて過ぐる身ぞ」		

#####	雪月花 絶唱 交響	白紗の花と月とをくりかへし糸の 果たてに夕暮の雪	真っ白な春の桜と秋の月とを繰り返しては、毎年訪れる冬の雪の 夕暮れの繊細美よ。その繊細さは、四季という糸の端に雪を結ぶ ようである。	◇掛詞「くりかえし(反復×たぐる)」 ◇縁語「繰り返す、糸」 ◇本歌取「春の花秋の月にも残りける心の 果ては雪の夕暮」		
#####	雪月花 絶唱 交響	人の心浅茅がすゑの空に見つ面 影残る秋の月夜に	空に満ちるようなあなたの心の浅さを、失恋の末にやっと知ったこ とです。秋の浅茅が原の空に、あなたの面影を残す月を眺めて。	◇掛詞「(心)浅×浅茅」見つ×満つ」秋 ×飽き」 ◇本歌取「ふるさとは浅茅がすゑになりは てて月に残れる人の面影」		
#####	雪月花 絶唱 交響	浦波や月照る舟に蘆の声何はの ことを海につどへて	打ち寄せる波に乗る舟に月が照り、蘆のそよ音が満ちる、難波 の海岸。海のあらゆる趣を集えた情景である。	◇掛詞「何はのこと×難波」 ◇歌枕「難波」 ◇本歌取「難波渦まだら若き蘆の葉をい つかは舟の分けわびなまし」		
#####	雪月花 絶唱 交響	山鳥や夜な夜な恋の音(ね)にな く身遠き道をばとにもたぐはむ	山鳥よ。毎晩、私と同じく、寝床で失恋の悲しみに音を立てて泣く 身の上なのですね。叶うには程遠い恋の道を、一緒に歩いてゆき ませんか。	◇掛詞「音×寝」鳴く×泣く」 ◇本歌取「朝な朝な雪のみ山に鳴く鳥の声 におどろく人のなきかな」		
#####	雪月花 絶唱 交響	いかにせむ命と花の得がたさに のちの世と春さても夢見て	どうしようもない。人の命と春の桜とは、一度失うと得がたい崇高 な宝だ。だが、我が死後にも、世の中というもの、春という季節が あることを、夢見てしまうのだ。	◇本歌取「夢の世に月日はかなく明け暮れ てまは得がたき身をいかにせむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	今もまた昔の朝の春霞心は明け ぬ夜半の桜も	今もなお、昔のままの霞がかかる春の朝である。しかし、心は世 が明けけるようには明るくならない。桜の花がかお霞に隠れて、夜 のように見えぬままであるから。	◇本歌取「見ぬ世まで思ひ残さぬながめよ 昔に霞む春の曙」		
#####	雪月花 絶唱 交響	風払ふ袖より雨のふるさとの下の 草葉もわが涙かな	帰ってきた故郷よ。袖に降る雨を風が吹き払い、地面近くの草の 葉に散らしている。我が涙も、袖に降り、草の葉に降ることだ。	◇掛詞「雨の降る×故郷」 ◇本歌取「夏草のもとも払はぬふるさとに露 より上を風かよふなり」		
#####	雪月花 絶唱 交響	あつき夜にかをりし床のひと扇ぎ 今宵になるは風の秋の音(ね)	暑い夏の夜、まだ熱い恋の熱をあの人と通じ合った寝床が懐かし い。恋が終わった秋の今、寝床をひと扇ぎする音は、あの人の薄 情な別れ話に聞こえるのでした。	◇掛詞「暑き×熱き」今宵になる×鳴る (音)「秋×飽き」 ◇本歌取「手にならず夏の扇と思へどもた だ秋風のすみかなりけり」		
#####	雪月花 絶唱 交響	稲妻に宿も袂も荒れにけりはかな 手枕(たまくら)露はふるへて	あの人か去ったこの宿も、私の袂も、荒れてしまいました。稲妻が 光る中、独りで儂い手枕をしながら、涙に震えています。	◇本歌取「はかなしや荒れたる宿のうたた 寝に稲妻かよふ手枕の露」		
#####	雪月花 絶唱 交響	暮れかかる露の数ほどのぞ思 ふ置きどころなく余る袂に	置きどころがないほどに袂にかかって余りある涙の数と同じだ け、物思いに沈んでいる夕暮れです。	◇掛詞「暮れかかる×かかる(露)」 ◇本歌取「もの思はでかかる露やは袖にお くながめてけりな秋の夕暮」		
#####	雪月花 絶唱 交響	昔見し涙の月に似たるかな広沢 の池にうかぶ面影	広沢の池に浮かぶ月の影のゆらめきは、かつて涙しながら見上 げた月の姿に似ていることだ。	◇歌枕「広沢の池」 ◇本歌取「心には見ぬ昔こそうかびけれ月 にながわる広沢の池」		
#####	雪月花 絶唱 交響	草の原秋より先の心見つ景色一 つに道を迷ひて	この草原に、秋よりも一つ未来の冬の心というものを見た。一面 枯れ色に満ちた景色の中で、道に迷いながら。	◇本歌取「見し秋をなに残さむ草の原一 つに姿はる野辺の景色に」		
#####	雪月花 絶唱 交響	黄昏のほの三島江の中空に色人 の影の月を忘れず	黄昏時に、貴女を垣間見た。心が落ち着かない。三島江の空に 出た美しい月のような貴女を、忘れたい。	◇歌枕「三島江」 ◇掛詞「ほの見し×三島江」「中空に(空に ×落ち着かず)」 ◇本歌取「忘れずよほのほの人を三島江の 黄昏なりし暮の迷ひに」		
#####	雪月花 絶唱 交響	幾峰を越えて今宵に貴船山東も 西も袖の水の尾	いくつかの峰を越えて、今宵、この貴船山にやって来ただろう。東の 麓に水の神を祭る貴船神社はともかく、我が袖は四方八方に涙と いう水が尾を引いている。	◇歌枕「貴船山」 ◇掛詞「今宵に来×貴船山」 ◇本歌取「幾夜われ波にしをれて貴船川袖 に玉散るもの思ふらむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	もろとも私も、お互いに死んで、火葬の煙となって空に昇り、雲と なる夢はいつか叶うけれど、それは、山の峰にぶつかって分かれ る雲のように、現世には逢わずに別れた私たちの仲の果てに訪 れ	あなたも私も、お互いに死んで、火葬の煙となって空に昇り、雲と なる夢はいつか叶うけれど、それは、山の峰にぶつかって分かれ る雲のように、現世には逢わずに別れた私たちの仲の果てに訪 れ	◇掛詞「峰×見ね」 ◇本歌取「生けらばと誓ふその日もなほ来 ずはあたりの雲をわれとながめよ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	昨日まで袖を形見にながめつつ 消え果つるまでの夜の移り香	昨夜までは、あなたと過ごしたやすがに使用たのに、もはやあと は消え果てるのを待って泣くしかない、袖の移り香。	◇本歌取「ありし夜の袖の移り香消え果て てまた逢ふまでの形見だになし」		
#####	雪月花 絶唱 交響	風の色すこしは秋の有明にし のひ片敷きそめし一人寝	風もだんだん秋の色になり、あなたの飽き心も見えてきて、昨夜 から悪い忍びつつ一人寝することになった今朝の私の袖に、有明 の月が宿っています。	◇掛詞「秋×飽き」あきの有り×有明」 ◇本歌取「月やそれほの見し人の面影をし のひかへせば有明の空」		
#####	雪月花 絶唱 交響	年を経てかへらぬ人に色かへる 袖をたよりの恋の残り香	年月が経ち、私の元に帰らない恋人。唯一頼りだった恋人の残り 香のする袖の色も、あせた。	◇掛詞「帰らぬ人に色返る」 ◇本歌取「恋しとは便りにつけて言ひやりき 年は還りぬ人は帰らず」		
#####	雪月花 絶唱 交響	今日も聞く来ぬ夕暮の風の声を 涙のうらみの床のうきねに	浜辺で海を眺めながら、今日も女は聞く。恋人が来ないことを告 げるような風の音を。涙の海に浮き寝しそうなくらいに、つらい泣 き声で、恋人を恨みながら。	◇掛詞「浦見×恨み」浮き寝×憂き音」 ◇本歌取「いつも聞くものとや人の思ふらむ 来ぬ夕暮の松風の声」		
#####	雪月花 絶唱 交響	思ふ方空に標結(しめゆ)ふ中の 夜におとなふものは鳥の一声	夜、女ばかりが恋人のいる方角に思いを寄せても、二人の約束 は空にしめ縄を張るようなもので、そんな儂い男女の仲を訪れる のは、ただ鳥の一声だけ。	◇掛詞「中×仲」「夜×世」(世の中) ◇本歌取「時しもあれ空飛ぶ鳥の一声も思 ふ方より来てや鳴くらむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	同じ秋を鹿の心の底に見きさひし 野辺にける夕暮	夕暮れ時、鹿が寂しげに野原で鳴いている。その声に、私と同じ ように秋の悲しき情趣を理解する鹿の心を見た。	◇本歌取「この頃の心の底をよそに見ば鹿 鳴く野辺の秋の夕暮」		

#####	雪月花 交響	絶唱 響	濡襟(みをつく)朽ちて折れても 立てかへし思ひ印にまだ舟を見 ず	濡襟が朽ちて折れても何度でも立て返すように、身を滅ぼしてでも 片想いする確かな心が朽ちて折れそうになっても立ち直り、それ でも舟が濡襟を見つけてくれないように、恋人に振り向いてもらえ 田の稲が実る中、来ない恋人をまだ期待して待った秋は昔、もう 春も過ぎ、雁ばかりが行ったり来たり、通って来てくれる、この里 の曙よ。	◇掛詞「濡襟×身を尽くし」印×著し ◇本歌取「深き江に今日たてそむる濡襟涙 に朽ちむ印たにせよ」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	来ぬ人をたのむの秋も春過ぎて 雁のみ渡る里の曙	来ぬ人をたのむの秋も春過ぎて 雁のみ渡る里の曙	◇掛詞「頼む×田の面」 ◇本歌取「また来む秋をたのむの雁だに も鳴きてぞ帰る春の曙」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	我が雫する袂に影分けてあや めにうつる夏の夜の月	軒の菖蒲の雨の雫に、夏の夜の月は映り込む。私の涙がすがり ついている袂にも、月の影を分け映しつ。	◇本歌取「雨はるる軒の雫に影見えて菖蒲 にすがる夏の夜の月」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	袖と庭と秋のよすがはあせ果て ぬ揺らぎし月は霜に凍りて	秋の月が宿る場所として頼りにしていた袖の涙と庭の露の透明 感、あせ果てた。今まで揺らいできた月影が霜のうちに凍って 動かない冬がやって来た。	◇本歌取「月宿す露のよすがに秋暮れてた のみし庭は枯野なりけり」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	恋の果てただよふ雲の夕暮のの ちまで上の空のさまよひ	私の落ち着かない恋心は、果てしなく漂う夕暮れの雲が、ずっと ずっと後世の空にまでさまよひ続けるようなものです。	◇掛詞「うわのそら(上空×落ち着かない)」 ◇本歌取「恋ひ死なむわが世の果てに似た るかなかひなく迷ふ夕暮の雲」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	ふるさとを出てし心はよその星桂 の道をめぐるまよひぞ	故郷を出て旅する心とは、月に行き桂の木々の生えた道をさま ようようなものだ。	◇本歌取「月のすむ都は昔まよひ出でぬ幾 夜か暗き道をめぐらむ」 ◇対句「春の夢//冬のうつつ」「見ぬ花//聞 く霜の声」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	春の夢を冬のうつつに覚め果て てまだ見ぬ花に聞く霜の声	春の夢を見たが、目覚めると、現実には寒い冬であった。まだ見 ぬ花々、聞こえてくる霜の割れる音。	◇本歌取「冬の夢のおどろきはつる曙に春 のうつつのまづ見ゆるかな」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	春とても覚めぬ常世(とこよ)のな きを知り雁の帰りに残る面影	今は春だと言っても、覚めない永遠の春はない。覚めない恋の夜 はない。そのことを知って返ってゆく雁の姿に残る、恋人の面影。	◇本歌取「帰る雁雲のいつこになりぬらむ 常世の方の春の曙」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	紫の草の上吹く秋風やむかしに 光る時の下露	紫草の上に秋風が吹く。今の世へと続く、古き良き時代の輝きを 思わせて、草葉の露がわずかに光る。	◇本歌取「秋風の紫くたく草むらに時うしな へる袖ぞつゆけき」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	雁がねは月と花とを折り返し夏の 便りになくわが身かな	雁が月の秋と桜の春に行ったり来たりする中、私は、あの人から 頂いた夏の幻の雁の玉章を拝読しております。お手紙もない中、 雁の鳴く音のように泣いております。	◇掛詞「折(季節)×折り返し」「鳴く×泣く」 ◇本歌取「帰る雁今は心の有明に月と花と の名こそ惜しけれ」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	中川も花散る里のうつろひに昔聞 こえし袖を忘れじ	時は移ろい、昔の恋人が住んでいた中川の里の花も散った。袖 の花の香りを移し合った昔を、忘れまい。	◇参照『源氏物語 花散る 中川』 ◇本歌取「橘の花散る里の夕暮に忘れそめ ぬる春の曙」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	思ひ出づ蘆間(あしま)に螢飛ぶ 夜はほの見し影を残す中空	思い出す。蘆の茂みの間から空に螢が飛びゆく夜は、あの人 の姿を垣間見てうわのそらになった日を。螢の光が、あの人 の面影を残しては消える。	◇掛詞「中空(空×うわのそら)」 ◇本歌取「いさり火の昔の光ほの見えて蘆 屋の里に飛ぶ螢かな」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	もみぢ葉の心もろともまさる色をう つす夕暮袖いかにせむ	紅葉の葉も、私の恋心も、一緒になって赤く染まってゆく。そんな 赤色を移したかのように染まる夕日に、また染められる袖の涙 は、どうすればよいのでしょうか。	◇掛詞「映す×移す」 ◇本歌取「おしなべて思ひしことのかずか ずにほ色まさる秋の夕暮」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	夕暮は寝ぬ夜の果てを知らざりき わが袖ばかり有明の床	昨日の夕暮れ時には、寝ないことになる夜の結果など知りませ んでした。今朝、寝床にあるのは、有明の月影を宿す私の涙の袖ば かり。	◇掛詞「わが袖ばかり有り×有明」 ◇本歌取「われかくて寝ぬ夜の果てをなが むともたれかは知らむ有明の頃」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	蘆の根の夜々を夢路に三島江よ 中洲の枕今日も茂らで	三島江の蘆の根の節々のように短い間だけあなたにお会いす る夢を見ました。ちょうど三島江の中州の真ん中でお会いするよ うな歩み寄りはなく、今日も私の枕に恋は茂らないのでした。	◇枕詞「蘆の根の一夜々」 ◇掛詞「根×寝」「節々×夜々」「三島江× 見し」 ◇縁語「蘆、根、節々、三島江、茂る」 ◇本歌取「三島江や茂りはてぬる蘆の根の		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	雪乱れ嵐の旅の氷にも夢をむす べと庵の萱ぶき	雪が嵐にふぶき乱れる旅。萱葺き屋根の仮小屋が、「冷たい氷の 上でも我慢して夢を見よ」と言っている気がするほど、厳しい冬 の	◇本歌取「嵐吹く空に乱る雪の夜に氷ぞ むすぶ夢はむすはず」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	我が心卵の花くたす袖の音は秋 に尾をひく山ほととぎす	卵の花をくたすような五月雨が袖に降る音。その音に、夏が過ぎ るのを惜しむほどとぎすの鳴き声、私の嘆き声が混じる。	◇縁語「音、尾、ほととぎす」 ◇本歌取「おのづから心に秋もありぬべし 卵の花月夜うちながめつつ」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	ほととぎす鳴く音(ね)軒端(のき ば)にうちしめり五月雨かをる夕 月も人も闇に松島望みあへず心 の奥の塩竈の浦	ほととぎすが鳴く音が軒端の菖蒲に湿り響き、香り高い五月雨が 降る夕暮れの空よ。	◇本歌取「うちしめり菖蒲ぞかをるほととぎ す鳴くや五月の雨の夕暮」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	月も人も闇に松島望みあへず心 の奥の塩竈の浦	月が出て恋人が現れるのを待っても、望みは薄い。闇の中に隠 れる松島よ、私の心の奥にはかり見える塩竈の海よ。	◇本歌取「それなほ心のほてはありぬべ し月見ぬ秋の塩竈の浦」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	薄氷(うすごほり)上の春風面ふ れて流れそめぬる明日の下水	薄氷の上面に春風が触れ、氷が解け始めた。明日には、水となっ て流れていることだろう。	◇本歌取「春風に下ゆく波のかず見えて残 るともなき薄氷かな」(以下50首は家隆作)		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	思ふどち春待ち侘ぶる涙かな花 の氷に鶯の霜	まだ花の咲かない桜の枝に張った氷と、そこに何とか止まってい る鶯の羽に置いた霜は、気の合った春の風物どうしとして共に春 を待ち侘ぶる。桜と鶯の涙ではないか。	◇対句「花の氷//鶯の霜」 ◇本歌取「思ふどちそことも知らず行き暮れ ぬ花の宿かせ野辺の鶯」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	冬越えてなほ松山にほのあけし 極(とほそ)と夜のよその横雲	女は、恋人の来ない冬を乗り越え、なお待ち続け、玄關の戸を少 し開けておくものの、いつも来ずに夜が明ける。女をよそに、古歌 にある末の松山の空のように、雲が横にたなびいてゆく。	◇本歌取「霞たつ末の松山ほのほのと浪に はなる横雲の空」		
#####	雪月花 交響	絶唱 響	花に霜梢に氷秋かくて冬によす がのあとの夕暮	花や梢に置いた秋の儂い露は、霜となり氷となって、確かな形を 作ってゆく。秋はこうして、冬の夕暮れの霜や氷の美に、自らの時 があったことを刻印するのである。	◇掛詞「冬に寄す×縁」 ◇本歌取「いかにまた秋はタベとながめき て花に霜おく野辺の曙」		

#####	雪月花 絶唱 交響	明日よりは逢ひこそ峰の白雲に 今朝を形見のひまの月影	明日からは、あなたに逢えず、いつ再び結ばれるかも知らない 中、最後となった今朝の忘れ形見として、白雲の間から有明の月 が見えています。	◇掛詞「峰×見ね」白雲×知らぬ」 ◇本歌取「風吹かば峰に別れむ雲をだにあり しなごりの形見とも見よ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	面影や時ぞともなき悲しさを忘れ がたみの秋の夕暮	あなたの面影よ。時を問わず味わっているこの失恋の忘れがた い悲しさだけが忘れ形見の、秋の夕暮れです。	◇掛詞「忘れ形見×忘れ難み」 ◇本歌取「時しもあれ悲しかりける思ひかな 秋の夕べに入は忘れじ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	思ひ入る草の庭にながめして夢 路をうつむ夕闇の空	思い悩んで分け入った草原に敷いた庭に、長雨が降る。物思ひし ながら寝入った夢の中の空まで、夕闇にうつまっています。	◇掛詞「長雨×眺め」 ◇本歌取「思ひやるながめも今は絶えねと や心をうつむ夕暮の空」	
#####	雪月花 絶唱 交響	胸の富士夜半の高嶺(たかね)も しのびあへて山路の煙朝消え果 てず	富士山のように恋にくすぶる胸。夜中は、高い峰のように高鳴っ てこらえきれず、朝になっても、火が噴き出そうな山道の煙は消え 果てない。	◇対句「夜半、高嶺、しのびあへず//朝、山 路の煙、消え果てず」 ◇本歌取「富士の嶺の煙もなほぞ立ちのぼ るよなきものは思ひなりけり」	
#####	雪月花 絶唱 交響	さそへ風山川ばかり春なさで冬か れし床に同じにほひを	風よ。山や川にばかり春を運んで来ないで、冬にあの人が去って 濡れてしまった私の床に、同じ春の匂いを運んで下さい。もう一 度、あの人を誘って来て下さい。	◇掛詞「枯れ×離れ」 ◇本歌取「谷川のうちいづる波も声立てつ 當さそへ春の山風」	
#####	雪月花 絶唱 交響	人恋ひし伊勢の涙にあともなし昔 ばかりにかをる梅が香	恋人であるはずの私に知らせずに結婚し、結婚したらしてで失敗 して悲しみに沈んだ、『伊勢物語』を現実にしたような女よ、そんな 貴女が恋しい。貴女が涙しても、花のような昔の痕跡はもうない。 今や記憶の中だけで香る、梅の花よ。	◇参照『伊勢物語』 ◇本歌取「梅が香に首をとへば春の月こた へぬ影ぞ袖にうつれる」	
#####	雪月花 絶唱 交響	宿てふ月と袂のかねごとか涙 は聞かずかく濡れよとは	月が袂に宿っているのは、月が袂に宿ることにしようという、月と 袂とが予め交わした約束があったからではないか。我が涙は、こ れほど多く流れて袂を濡らし月を宿せよ、とは聞いていなかった	◇本歌取「誰が秋にあらぬ光を宿し来て月 よ涙に袖濡らすらむ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	夢もまたことごとくなく明け残り形 見顔なる袖と月影	現実と同じく、夜の夢の中でもあの人に会えず、何も嬉しいことが ないまま夜は明け、目覚めた私の涙の袖と、そこに映る月影が、 恋の形見であるかのように厳然と残っているだけです。	◇本歌取「逢ふと見てことごとくなく明けぬ なりはかなの夢の忘れ形見や」	
#####	雪月花 絶唱 交響	旅なれば枕を涙清見濁別れし人 よ契りすばで	清見濁を旅するたびに、ここで別れた女を思い出す。枕の涙は清 見濁の波のようだ。別れた女よ、永久の約束も交わさずに。	◇本歌取「契らねど一夜は過ぎぬ清見濁波 に別るあかつきの雲」	
#####	雪月花 絶唱 交響	黄昏の声は臥しどにほととぎす去 年(こぞ)のわが身に五月(さつ き)来にけり	黄昏時、寝床に臥して泣いている私の身に、ほととぎすの鳴き声 が聞こえてきた。私が去年のままの鬱々とした気分である中、もう 五月がやって来た。	◇掛詞「声は臥し×臥しど」 ◇本歌取「時も時それかあらぬかほととぎ す去年の五月の黄昏の声」	
#####	雪月花 絶唱 交響	髪にさへつる扇をならしても秋 の実近くある夏の香	夏の香りは、扇をあおぎ鳴らせば、たちまち私の髪にまで染み移 りますが、木の実の生る秋は近く、我が身があの人に飽きられる 日も近く、頼み慣れたこの夏の香りも、もうすぐあせてゆくでしょ	◇掛詞「鳴らす×慣らす」秋×飽き」実× 身」 ◇本歌取「身に近くならず扇も櫓の葉の下	
#####	雪月花 絶唱 交響	唐衣(からころも)裾引く雲の黒髪 の待てど涙に曇る下陰	私の着物の裾や黒髪の裾のように、雲が長くなびく。それほど 長くあの人を待っても、曇り空の下、私は涙に曇っている。	◇枕詞「唐衣一裾」 ◇本歌取「唐衣日も夕暮の空の色曇らば曇 れ待つ人もなし」	
#####	雪月花 絶唱 交響	人の心浅茅が宿にしのびあへず 消ぬべき霜の声に泣くかな	あの人に来てなくなって寂れた私の家。あの人を浅い恋心に耐えき れず、霜の降りる音のように泣いてしまう。私の命も、やがて霜の ように消えてしまおうでしょう。	◇本歌取「思へども人の心の浅茅生に置き まよふ霜のあへず消ぬべし」	
#####	雪月花 絶唱 交響	憂しつらし涙の空は時分かず春と 秋とに宿る有明	つらい。苦しい。春も秋も時を問わず流れる涙に見上げる空に は、いつも有明の月が宿っております。	◇本歌取「時しもあれなどあながちにづら らむ秋は夕暮月是有明」	
#####	雪月花 絶唱 交響	夜もすがら月出づる夢の稲妻や 光の間だに逢ふこともなし	夜通し、空に明るいう月が出ている夢を見た。雷の音に目が覚めて みると、稲光の光る短い間のように貴女に会う瞬間さえ、全くない 現実があった。	◇本歌取「入るまでに月はながめつ稲妻の 光の間にももの思ふ身の」	
#####	雪月花 絶唱 交響	面影の人は心にかがり火の消ゆ る命に鹿の巻き筆	あの人を素敵な面影が心にかかっています。あの人を鹿の猟の ために灯していたかがり火のように、恋い死んで消え入りそうな 命です。恋が叶うと聞く鹿の巻き筆で、恋文を書いています。	◇掛詞「心にかがり×かがり火」 ◇本歌取「ますらをが端山の照射影消えて 知るは命や有明の月」	
#####	雪月花 絶唱 交響	露とはで冬に生田の森を見きす みかのあとに霜ぞ迷へる	露の置く秋には一度も訪れなかったが、冬に生田の森を訪れた。 かつての我が恋人の住まいの跡に、寂しく霜が降りていた。	◇掛詞「露(秋の露×少しも)」冬に行く× 生田」 ◇歌枕「生田の森」 ◇本歌取「昨日だにとはむと思ひし津の国 の生田の森に秋は来にけり」	
#####	雪月花 絶唱 交響	恋もまた折々夢に重ね来し咲き 渡る露置きまよふ花	春の桜や秋の露のように、恋もまた、四季折々に重ねてきた我が が人生、恋の成就是、まるで、秋の露という春の桜が咲き渡り、春 の桜という秋の露が置き乱れるように、全くの夢幻だけれど。	◇対句「咲き渡る露//置きまよふ花」 ◇本歌取「露や花花や露なる秋くれば野原 に咲きて風に散るらむ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	月草のうつりおきける朝露の夢見 しよそこに花の残れり	月草の花に置いた朝露のように、ほんの儂く短い間、夢の中であ の人に会いました。目覚めてみると、庭先には、朝露に濡れて色 あせてゆくだけの月草の花が咲き残っているのです。	◇枕詞「月草のうつり」 ◇本歌取「夜もすがら重ねし袖は白露のよ そにぞつづる月草の花」	
#####	雪月花 絶唱 交響	逢ふ夢も波の枕の清見濁袂に影 は寄せてかへらず	あなたに夢でお会いすることさえなく、枕は清見濁に打ち寄せる 波のような涙に濡れています。袂の涙も寄せるばかりで、沖へ返 る波のようにはいかず、月影を映しています。	◇掛詞「夢も無み×波」 ◇本歌取「清見濁波も袂も一つにて見し面 影を寄する月影」	
#####	雪月花 絶唱 交響	須磨の月夢の直路(ただち)の関 守に鳴くや千鳥の一人寝の床	月の美しい須磨の地よ。夢の中で見た、恋人に辿り着けるまっす くな恋路がせき止められていたのも、須磨の関守のせいかとさえ 思う。千鳥が鳴く中、私は一人で寝るばかりです。	◇歌枕「須磨」 ◇対句「千鳥//一人」 ◇本歌取「月もいかに須磨の関守ながむら む夢は千鳥の声にまかせて」	

#####	雪月花 絶唱 交響	波かかろうきね慣れ来し浜松の水を流らして夢に通はず	夢の中でさえ、少しもあの人とは通って来てくれません。波をかぶり根が浮くことにも慣れてきた浜辺の松が、かぶった海水をまた洩らすように、こんな風に泣きながら寝て、自分で涙という水を流したりかぶったりするつらさに慣れてしまっています。	◇掛詞「掛かる×斯かる」「浮き×憂き」「根×寝×音」 ◇本歌取「はかなし水の浜松おのづから見え来し夢の波の通ひ路」	
#####	雪月花 絶唱 交響	月影の下もさやけき萩の風に秋ほのめかす夕暮の声	夕暮れの空に、澄みきった月の姿。その下で萩に音を立てて吹く風も、秋の訪れをそれとなく告げるかのように、澄み始めている。	◇本歌取「みな月の秋ほのめかす夕暮をさやかに告ぐる萩の上風」	
#####	雪月花 絶唱 交響	月の色を夜々に契りし夕顔も果てぬる花の床の朝枯れ	夜ごと秋の月の澄んだ色を受け入れてきた花壇の夕顔の花も、すっかり枯れ果て、冬の朝がやって来た。	◇本歌取「天の原空行く月や契りけむ暮るれば白き夕顔の花」	
#####	雪月花 絶唱 交響	秋の闇(ねや)待つ手になれし扇紙はらめく果てに木枯らしぞ吹く	恋人に飽きられた女の、秋の寝室。女が待ちながら夏にあおぎ慣れた扇の地紙も、今はぼろぼろになったまま、そばに置いてあるのだった。その骨だけの扇に、冬の木枯らしが容赦なく吹きつけ	◇掛詞「秋×飽き」 ◇本歌取「秋ふかき闇の扇もあはれなり誰が手にふれて忘れ来ぬらむ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	散り果つる春の惜しさに似たるかな露をかれゆく月影の色	花々が散り果てて春が終わる時の惜しい気分似ていることだ。映っていた月影の色が露を去って秋が終わる時の気分は。	◇本歌取「花はさそ色なき露の光さへ心にうつる秋の夕暮」	
#####	雪月花 絶唱 交響	白波に濡れし水鳥うち羽ぶき沢辺(さばへ)の草葉玉敷きの床	白波に濡れた水鳥が羽ばたき、水ぶきを上げる。沢辺の草の葉にかかった色々な水滴は、宝石を敷き詰めた寝床のようであ	◇本歌取「白波に騒ぐ沢辺の水鳥も玉散るばかりものやかなしき」	
#####	雪月花 絶唱 交響	わが袖も露のゆらぎはよわりそめつれなく凍る冬の片敷き	私の袖の涙も、秋の露と同じく、揺らぎが弱り始め、やがて冬が来て、冷たく凍る。その袖の霜の中、相変わらず一人寝する私よ。	◇本歌取「つれなきさの心くらべも今日よりはわが身によわる夕暮の空」	
#####	雪月花 絶唱 交響	たまきはる枕幾夜を舟路にて一人旅寝に乗りしあだ波	一人で舟旅に出て、荒波に乗りながら枕に寝て、幾夜経ったことでしょう。あだ寝を繰り返す片想いの旅はいつまで続くでしょう。	◇枕詞「たまきはる一幾夜」 ◇本歌取「たまきはる命をあたに行く舟のあはれはかなき波の上かな」	
#####	雪月花 絶唱 交響	春の雁送るばかりにまたの秋かへしは添はぬ便りさてのみ	春に見送った雁は、秋にまた渡って来てくれました。春にあの人に手紙を送りましたが、秋になってもお返しが頂けず、それきりで	◇本歌取「誰がなかに遠ざかりゆく玉章の果ては絶えぬる春の雁がね」	
#####	雪月花 絶唱 交響	山桜散りし木蔭(こかげ)の旅寝より振りさけ上(あ)ぐるまほろし	花の散った山桜の木蔭に旅寝し、空を見上げると、幻の花が咲いて見えるのだった。	◇本歌取「旅寝する花の木蔭におどろけば夢ながら散る山桜かな」	
#####	雪月花 絶唱 交響	白妙のくもる契りの暗き雨に袖かゝる恋の花の色塗る	恋人との約束の曇りを象徴するように、白雲の空が暗く曇って雨が降る中、恋する私の袖に染み香っている、花のような紅涙の色を、空中の雨に塗りつける。	◇枕詞「白妙の一雨、袖」 ◇本歌取「待つ人のくもる契りもあるものを夕暮あさき花の色かな」	
#####	雪月花 絶唱 交響	夢うつつ数ふる幾夜白雲に絶えぬは峰の花の春風	夢うつつの中、幾夜山の峰に桜が咲く季節を待ったか、幾夜あなたの訪れを待ったか、数えきれないほどだったのに、今や白雲の曇りの下の峰に絶えないものは、桜を散らす春風、あなたとの別	◇掛詞「幾夜知らぬ×白雲」 ◇本歌取「桜花夢かうつつか白雲の絶えてつれなき峰の春風」	
#####	雪月花 絶唱 交響	旅の先月を隠せる山の端のそれも覆ひし白雲の空	旅路の先のほうには、月を隠している山の稜線。そして、それをも覆い隠している白雲の空。	◇本歌取「明けばまた越ゆべき山の嶺なれや空行く月のすゑの白雲」	
#####	雪月花 絶唱 交響	春の香の限りも近きほととぎす音(ね)も鳴きあへてわが世ふけゆく	春の花々の香りの終焉も近く、ほととぎすも鳴き始めた。いや、ほととぎすが鳴きさるより先に、私が泣きさるよりも先に、我が人生は更けてゆくのであった。	◇本歌取「近き音もほのかに聞くぞあはれなるわが世ふけゆく山ほととぎす」	
#####	雪月花 絶唱 交響	来し昨夜(こぞ)は星の道散る光さへ消えかへるさに秋風ぞ吹く	あの人に来てくれた昨夜、あの人歩いてきた玄関先の道は、夏の天の星々が降ってきて光を散りばめたかのように見えた。あの人帰った今、道の光も消え果てて、秋風が吹いている。	◇掛詞「消え返る×帰るさ」 ◇本歌取「しるせよおくる心の帰るさも月の道吹く秋の山風」	
#####	雪月花 絶唱 交響	忘れし身の宇治川に思ひかけまた渡りてよ橋姫の跡(あと)	あなたに忘れられて宇治川に身を投げ、橋姫となった私の身のつらさに思いをかけ、また宇治橋を渡って、私の痕跡だけでも訪れていただけませんか。	◇掛詞「身の憂し×宇治川」 ◇縁語「川、かく、渡る、橋」 ◇本歌取「なか絶えし身を宇治橋の川千鳥ふかき霜夜の跡も儂し」	
#####	雪月花 絶唱 交響	久方の都の光ほの見えてあとはながめのさびしさの空	遠い月にあるという都の街の光がほの見えたと思ったら、長雨が降り、その後は寂しく空を眺めるばかりの幻想である。	◇枕詞「久方の一光、雨、空」 ◇掛詞「長雨×眺め」 ◇本歌取「ながめつつ思ふもさびし久方の月の都の明方の空」	
#####	雪月花 絶唱 交響	夏の影置き捨てたがみ扇(あふ)ぎ繼(つ)ぐ秋また月の頃よそにして	夏の月影が恋しく、夏が終わっても扇を置き捨てがたく、あおぎ続け、夏が続いている振りを。秋にはまた、中秋の名月のような月の見頃が溢れているのに、それをも気に留めないで。	◇本歌取「夏果てて誰が山の端に置き捨つる秋の扇と見ゆる月影」	
#####	雪月花 絶唱 交響	きぬぎぬを惜しくあかしの浦見ても千鳥の涙袖凍りつつ	共に夜を明かし、後朝を惜しみ、別れを恨みながら、氣丈に明石の浦を眺めても、飛んでいる千鳥たちの数ほどの涙が袖に落ちて凍っています。	◇掛詞「惜しく明かし×明石の浦」 ◇恨みても×浦見ても ◇歌枕「明石の浦」 ◇本歌取「ふるさとを思ひあかしの波枕袖の氷に千鳥鳴くなり」	
#####	雪月花 絶唱 交響	有明や空もさだかに志賀はあれど袖もうつしきうら泣きのゆれ	志賀の浦の空には、有明の月がはっきりと宿っているけれど、忍び泣く私の涙の袖にもはっきりと映り、揺れています。	◇掛詞「志賀はあれど×然ほあれど」 ◇映し×顕しき「うら泣き×浦泣き」 ◇本歌取「志賀の浦や遠ざかり行く波間より凍りて出づる有明の月」	
#####	雪月花 絶唱 交響	本荒(もとあら)の小萩はしたの秋の色になほなりきらぬ露の上風	まばらに咲いている小萩の花が、どっちつかず少し咲いている。秋の気配になりきらない中、露の上を吹く風も、まだ晩夏の匂	◇本歌取「たのまずようつろふ色の秋風にいざ本荒の萩の上の露」	
#####	雪月花 絶唱 交響	あすの萩うつろふ梅やさてもなほ心づからにめぐる面影	秋、色あせる萩の花。春、香り移ろう梅の花。四季折々の終焉の寂しさ。それでもやはり、自分で心づかざと巡らせてみる、四季折々の美の面影よ。	◇本歌取「恨みても心づからの思ひかなうつろふ花に春の夕暮」	

#####	雪月花 絶唱 交響	露となりたのめし末もさて置きて 伏見木枯らし深草の霜	あの人が期待させた恋の成就是不なく、さて置かれたようで、私の片想いは秋の露と終わりました。あとは、身を臥せて泣きながら恋い焦がれ、深く思い悩むだけです。伏見の里には木枯らしが吹き、深草の里には霜が降りています。	◇掛詞「伏見×(寝床に)臥し身」深草× (悩みが)深く「木枯らし×焦がらし」 ◇縁語「露、置く」 ◇歌枕「伏見、深草」 ◇本歌取「思ひ入る身は深草の秋の露たのめし末や木枯らしの風」		
#####	雪月花 絶唱 交響	秋来ぬやとふより先のそよそよは 仮寝中の篠竹の声	秋は来たでしょうか。そう問いかけるより先に、すでにそよそよと音を立てているのは、旅の中で仮寝する宿近くの篠竹なのでした。あなたは私に飽きましたか、とお尋ねするより先に、そうだと	◇掛詞「秋×飽き」「そよそよ(擬音×そうだよ)」 ◇本歌取「篠原や知らぬ野中の仮枕松もむ」 ◇掛詞「夢にだに(夢の中でさえ×少しも)」		
#####	雪月花 絶唱 交響	夢にだに逢ふ夜涙のうき枕馴れ しは袖の面影の月	夜の夢の中でさえ、少しあの人に会えない。涙で枕が浮いてしまいそうなつらさです。袖の涙に、あの人を面影を思わせる月が宿り慣れてしまいました。	◇掛詞「浮き×憂き」 ◇本歌取「うき枕波に波敷く袖の上に月ぞかさなる馴れし面影」 ◇掛詞「思ひ×火」		
#####	雪月花 絶唱 交響	くゆり満つ恋の煙のむなしさに立 ち別れても思ひ増す影	私の片想いの煙はまだくすぶり満ちたまま、空しくもお別れしましたが、今もあなたの面影を追って思いが増す日々です。	◇縁語「くゆる、満つ、煙、立つ、火、増す」 ◇本歌取「これやさば空に満つる恋ならむ思ひ立つよりくゆる煙よ」(以下50首は定家)		
#####	雪月花 絶唱 交響	散りかをる霞の奥を行方とて残る 梢に見ゆるまぼろし	香りがただよってゆく霞の奥のほうを、桜の花びらが散っていった方角の証しとして、あとに残された枝には、幻の花びらが咲いているのが見える。	◇本歌取「花の散る行方をだにも隔てつつ霞のほかにも過ぐる春かな」		
#####	雪月花 絶唱 交響	五月雨にかをる橋見あはれ覚 めぬるまでの夢の袖の香	五月雨に濡れて香り立つ橋を見た時の情趣、あなたを一目見た時の情趣よ。袖に移った香りがやがて覚めてしまうまでの、夢の	◇本歌取「五月雨の雲のあなたを行く月のあはれ残せとかをる橋」		
#####	雪月花 絶唱 交響	あぢきなく色を浮世にかこちても まことの道は秋の花の露	我が意識に見える森羅万象や人々の言動について、人生の苦楽とはそういうものだと行ったところで、真の仏道とは、そういう言説をも全て、秋の花の露のようなものだとする恬淡なのである。	◇本歌取「これもこれ浮世の色をあぢきなく秋の野原の花の上露」		
#####	雪月花 絶唱 交響	あせてゆく袖の形見と思ひしをあ らぬ光に宿る面影	あの人と交わし合ったこの袖の光など、あとは涙に濡れて色あせてゆくだけの寂しい形見と思う中、尋常ではない光を見せて、涙の袖に月影が映り込んでいるのでした。	◇本歌取「暮れてゆく形見に残る月にさへあらぬ光をそふる秋かな」		
#####	雪月花 絶唱 交響	寝覚めても月は昔に光るなり人 は夢よりほかに見えぬ	寝ても覚めても、月は昔のまま空に光っております。あなたは、寝ている間の夢にしか現れないですけれど、	◇本歌取「昔思ふ寝覚めの空に過ぎにけむ行方も知らぬ月の光の」		
#####	雪月花 絶唱 交響	思ひ明かす一人馴れぬる曙はわ が身のよその春の梢と	こう思って夜を明かす日々です。この明け方という時間は、あなたがそばにいない私にとっては、一人で迎えるのが習慣になっている時間ですが、そちらでは、枝もたわわな春の桜が朝日に照らされる時間なのでしよう。	◇本歌取「年経れど心は春のよそながらながめ馴れぬる曙の空」		
#####	雪月花 絶唱 交響	なべて見えず霞みつくせる中かを る梅と月とをまたおほふ空	見渡す限り一面に霞がかり、その中で香りを放つ梅と月よ。その香り高い霞を覆い尽くす、天空の缥缈美よ。	◇本歌取「月影のあはれをつくす春の夜にのこりおほくもかすむ空かな」		
#####	雪月花 絶唱 交響	まどろみにあひ通ひ路(ち)よとほ かりはうつつの春の雁渡る声	春、うとうとする中、あの人を通して来てくれた、ようやく会えた、と思っ目覚めると、北へ帰ってゆく雁の鳴き声なのだった。	◇本歌取「まどろむと思ひも果てぬ夢路よりうつつにつづく初雁の声」		
#####	雪月花 絶唱 交響	降りそめて今は夕べに時雨(し ぐ)り果て秋の形見に足る袂かな	時雨が降り始め、夕方になっても降り続き、一面すっかり濡れ果てた。私の袂も、自然の哀愁の涙に濡れた。秋という季節の形見にするには十分な、袂の時雨と涙よ。	◇本歌取「ゆく秋の時雨も果てぬ夕まぐれ何に分くべき形見なるらむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	しきたへの流るるほどをせきあへ ですがる枕にやむ恋もなし	敷いた寝床まで流れるのではないかというほどの私の涙はせき止められず、流されそうになる枕にすがりついても、涙はやまず、恋心もやまない。	◇枕詞「しきたへの一枕」 ◇本歌取「しきたへの枕流るる床の上にせきとめがたく人ぞ恋しき」		
#####	雪月花 絶唱 交響	忘れずは待つも短夜(みじかよ) 帰るさに袖の有明あひながむら む	あの人私のことを忘れなかったら、あの人をこんなに長く待つて夜を明かすこともなく、一緒に夜を過ごし、夜が短く感じられた翌朝のあの人帰る際、お互いの袖の涙に映った有明の月を眺め合ったことでしょう。	◇掛詞「待つも短(し)×短夜」 ◇本歌取「帰るさのものや人のながむらむ待つ夜ながらの有明の月」		
#####	雪月花 絶唱 交響	夜の萩朝の月草摺り分けむ色々 うつつのちの形見に	萩や月草など、朝屋晩に咲く色々な秋の草花を、着物の色々な所に摺り分けよう。色あせてしまう冬に眺める秋の形見として。	◇対句「夜の萩//朝の月草」 ◇本歌取「散らば散れ露分けゆかむ萩原や濡れてののちの花の形見に」		
#####	雪月花 絶唱 交響	人香(ひとが)なく一人(ひとり)明 星(あかほし)しみ果てぬかごと穉 (さかき)に声は聞こえて	あの人移り香も感じられない一人寝の夜を明かしました。神社から聞こえてくる神楽歌の「明星」が身に染み付くことです。来てくれないあの人をのする賢い言葉にも聞こえてしまいました。境内の穉の上には、明けの明星が出ています。	◇掛詞「一人明(かし)×明星」かごと賢き×穉」 ◇本歌取「香をとめし穉の声にさ夜更けて身にしみ果つる明星の空」		
#####	雪月花 絶唱 交響	もの近きうつつの春を理(うつ)め あへず炭火の空に白雪の花	現実にもうほとんど近くまで来ている春は、画竜点睛だけを欠いている。冬の炭火の煙が見る空に咲くのは、白雪の花である。	◇本歌取「霞あへすなほ降る雪に空とちて春もの深き埋火のもと」		
#####	雪月花 絶唱 交響	面影は羽搔(はねか)く鳴の片鳴 きに袖枕より夢ばかり立つ	羽ばたき鳴く鳴のように、私は一人で袖に涙し、枕に涙する。あの人を面影を追いつつ寝入って見た夢の中で、束の間、袖と枕から鳴が飛び現れ、あの人立ち現れた気がした。	◇掛詞「鳴き×泣き」「夢ばかり(夢にばかり×少し)」 ◇本歌取「から衣すそ野の庵の旅枕袖より鳴の立つ心地する」		
#####	雪月花 絶唱 交響	露だにも末葉(うらば)に月を忘れ ずよ残る梢を木枯らしの冬	秋の露は、かろうじて木々の枝先に付いている葉に最後まで残り、月影を映すことを忘れない。そこに木枯らしが吹き、冬はやってくるのであるが。	◇掛詞「露だにも(秋の露さえも×少しの間さえ)」 ◇本歌取「かつ惜しむながめもうつる庭の色よ何を梢の冬に残さむ」		

#####	雪月花 絶唱 交響	なびく袖薄(すずき)ばかりにかこちても千草(ちぐさ)のあとの同じ露かな	あの人に心惹かれる私の袖を、同じようになびくススキの穂に喩えてみても、秋の花々が枯れた後のこの一面のススキに置く露のように、つらい涙まで同じなのでした。	◇本歌取 「夢かさは野辺の千草の面影はほのほのなびく薄ばかりや」		
#####	雪月花 絶唱 交響	薄雪や積もる涙ぞ凍り果つる一年(ひととせ)白く尽きてさむしろ	庭の薄雪の上にさらに積もった涙も凍り果てた。一年という時は、最後には白く寒く尽きたのである。	◇掛詞 「狭筵×寒し」 ◇本歌取 「一年をながめつくせる朝戸出に薄雪凍るさびしさの果て」		
#####	雪月花 絶唱 交響	別れ路(ぢ)よ命ばかりにむかふとて野辺の枕の露はそむかず	もう一度恋人に会いたい一心で自分の有限の命に立ち向かうからと言って、恋人と別れた路傍の野原の草葉に置く秋の露は、すぐに消えるけれど、そばに一人で枕する私の涙だけは、長い命な	◇本歌取 「かはれただ別る道の野辺の露命にむかふものは思はじ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	なごりなき浜はそなたの袖に見つよそや夢にも波はかへらじ	余波がない浜のように、私への心残りの涙もなく、乾きに満ちたあなたの現実の袖が、見えますよ。あなたに必要ななくなった私の袖は、夢の中でさえ沖へ返らない波に濡れていますけれど。	◇掛詞 「余波×名残」「満つ×見つ」「夢にも(夢の中にも)×少しも」 ◇本歌取 「心さへまたよそ人になりはてば何かなごりの夢の通ひ路」		
#####	雪月花 絶唱 交響	雨の床嵐の枕目覚めにき恋の旅路を夢に見て	雨嵐に涙の重なる旅先の寝床の上で、目覚めた。恋が叶う旅路を、夢の中にだけ夢見て。	◇対句 「雨の床//嵐の枕」 ◇本歌取 「ふるさとを出でしにまさる涙かな嵐の枕夢に別れて」		
#####	雪月花 絶唱 交響	知らざりき秋になるべき身の果てを寝ぬ夜の床に置きまよふ霜	知らなかった。秋に実った木々の実の最期を。あの人に飽きられた私の身の果てを。眠れない夜の床に、冬の霜が置き乱れています。	◇掛詞 「秋×飽き」「生る×成る」「実×身」 ◇本歌取 「忘れずば馴れし袖も凍るらむ寝ぬ夜の床の霜のさむしろ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	来ぬ人の飛火野(とぶひの)とほき若菜かな二葉(ふたば)も言はじ雪を仇(あだ)とは	私は、外敵来襲に備えた飛火のある飛火野の二葉の若菜のようです。私が萌え出るのを妨げる冬の雪をさえ、敵だと思ったことはありません。まして、摘みに来てくれずじれったいあなたについて	◇本歌取 「春の色を飛火の野守尋ぬれど二葉の若菜雪も消えあへず」		
#####	雪月花 絶唱 交響	ほととぎすわが身たぐふは音(ね)ばかりやよすがの袖は橘の陰	ほととぎすよ。私があなたに似ているのは、鳴き声だけで、姿の美しさなど、及びませんね。あなたは橘の枝をよすがとして止まりますが、私は袖を涙のよすがとして、橘の陰で泣いておられます。	◇本歌取 「ほととぎす何をよすがにたのめとて花橘の散り果てぬらむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	雁がねの上(うは)の空なるつらはなく時雨の中の葛(くず)の下折れ	時雨の季節、上空には雁の飛ぶ列もなく、葛はしな垂れている。悲しい悩む私の顔は泣いてばかり、心は折れてばかり。	◇掛詞 「上の空(上空×落ち着かない)」「列×面」「無く×泣く」 ◇本歌取 「いかにせむつら乱れにし雁がねのたちども知らぬ秋の心を」		
#####	雪月花 絶唱 交響	さみだれて心につる雲のみを天(あま)の足(た)り夜(よ)の星逢ひも見ず	五月雨の中、連なる雲の光景が、思い乱れる私の心に染み入る。天の牽牛星と織女星とが永遠に結ばれて涙をぬぐい合い、心満たされることがないように。	◇掛詞 「五月雨×さ乱れ」「星逢ひ×干し合ひ」 ◇慣用 「天の足り夜」 ◇本歌取 「天の川八十瀬も知らぬ五月雨に」		
#####	雪月花 絶唱 交響	さを鹿や月の入野の風のうちに鳴く音(ね)とまらぬ秋の夕暮	月が沈みゆく入野に吹く風のうちに、牡鹿のやまぬ鳴き声が響く、秋の夕暮れよ。	◇掛詞 「月の入る×入野」 ◇歌枕 「入野」 ◇本歌取 「さを鹿の鳴く音のかぎり尽くしてもいかに心に秋の夕暮」		
#####	雪月花 絶唱 交響	稲筵(ち)よの諸穂(もろほ)を夢に見き枕一つに片敷きの袖	稲筵を敷いて寝た夢に、幾千もの稲穂が突り突っている光景を見ました。幾千もの夜をあの人と過ごしたかったものです。現実の筵の上には、一つの枕に一人分の寝巻で寝ている私の身があるばかりです。	◇枕詞 「稲筵→敷く」 ◇掛詞 「千よ×千夜」 ◇対句 「千よ、稲、諸、穂//一つ、枕、片、袖」 ◇本歌取 「幾秋を千ちにくだけて過ぎぬらむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	玉くしげわが身一つに梳(と)きて寝(ね)ぬ二人の契り夢に明けつつ	一人で櫛箱を開けて、髪を梳いて寝ました。あなたと二人で過ごすはずだった約束の夜は、現実には明けず、夢幻のまま明けました。	◇枕詞 「玉くしげ一身、二、明く」 ◇対句 「わが身一つ//二人」 ◇本歌取 「玉くしげ明くれば夢の二見湯二人や袖の浪に朽ちなむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	とめ果てよ昔寄るべの初島はのちもうき寝の中の床の夜(よ)	もう一度、泊めさせて下さい。昔初めて停泊した島の港よ。心のよりどころとした、私の初めての恋人よ。あれから私は、夜の舟の中であつらい浮き寝を続けております。	◇掛詞 「昔寄る×寄る辺」「浮き×憂き」「寝×音」「中×仲」「夜×世(世の中)」 ◇本歌取 「いかにせむ浦の初島はつかなるうつつのちは夢をだに見ず」		
#####	雪月花 絶唱 交響	藻塩焼くわが身は袖のうら焦がれおもて濡れてのみみる渚(さ)や	藻塩を焼くようにあの人に片想いの火を燃やしている私。袖の裏が焦げそうほど恋い焦がれ、袖の表も波と共に涙で濡れる。それでも、海藻がない渚のように、お会いできるあてもない。	◇掛詞 「海松藻×見る目」「渚×無き」 ◇歌枕 「袖の浦」 ◇対句 「うら、焦がれ//おもて、濡れて」 ◇本歌取 「袖の浦かりに宿りし月草の濡れてのちをなほよたのまむ」		
#####	雪月花 絶唱 交響	分けまよふ露の鏡に色なべて月影渡る武蔵野の原	武蔵野の原一面に露が置き、鏡のようになっていく。月影の色も、その上を映り渡ってゆく。	◇本歌取 「誰が方による鳴く雁の音に立てて涙うつろふ武蔵野の原」		
#####	雪月花 絶唱 交響	思ひ余る身を百合の庭の人に葉陰の虫(む)いかで告げなむ	百合の葉陰にいる虫のような私。恋するあまりに身から漏れるこの螢火を、庭の持ち主であるあなたに、何とかして伝えたい。この気持ちをまだ知らないでしようから。	◇掛詞 「百合×身を知ら(じ)」 ◇本歌取 「さゆり葉の知られぬ恋もあるものを身より余りてゆく螢かな」		
#####	雪月花 絶唱 交響	冬の夢に直路(ただち)のしをり朽果てぬ覚めてつづらの知らぬ行く末	あの人に向かうまっすぐな道しるべも、ただの冬の夜の夢。目覚めると同時に、朽果てた。現実には続くつづら折りの恋路の、先の見えない果て。	◇対句 「直路//つづら」 ◇本歌取 「夢といへどいやはるかなる春の夜に迷ふ直路は見てもたのます」		
#####	雪月花 絶唱 交響	月も星も雨夜に逢はぬ折ぞある恋や昔の袖にかかれど	雨が降っていない時には見える月や星が見えない雨の夜もあるのです。私の片想いの涙の袖には、昔から月や星はこのように出ていますけれど。	◇掛詞 「掛かれど×斯かれど」 ◇本歌取 「わが恋よ何にかかれる命とて逢はぬ月日の空に過ぐらむ」		

#####	雪月花 絶唱 交響	短夜に黒髪は袖明かしけり庭の 草葉は露もみだれで	夏の短夜も、あの人が来てくれないので、この黒髪のように長く感 じられ、袖は涙に濡れたまま、夜を明かしました。庭の草の葉は、 少しも秋の露に濡れていないのに。	◇掛詞「露も(秋の露×少しも)」 ◇本歌取「おきわびぬ長き夜あかぬ黒髪 の袖にこぼる露みだれつつ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	散る花の鏡や曇りながめつつか よはぬ庭の床の缸(いしばし)	春風に吹かれて桜は散り、庭の床に落ち、鏡のような湖面も曇っ ている。春のうらの束の間、曇り空から長雨となる中、石橋を渡 る私は、春になっても通ってこない恋人のことで思い悩む。	◇掛詞「長雨×眺め」 ◇本歌取「風かよふ花のかがみは曇りつつ 春をぞかぞふ庭の缸」	
#####	雪月花 絶唱 交響	去る人の袖を心にひかへつつ身 の上織(ほそ)く残る三日月	去る恋人の袖を、手では引き止めず、心の中に引き止めた孤独 な身の上の女の頭上の空に、細く残る三日月であった。	◇掛詞「身の上(境遇×体の上方)」 ◇本歌取「面影のひかふる方にかへりみる 都の山は月織くして」	
#####	雪月花 絶唱 交響	氷雨降る霜のつばさぞとけわぶ る羽ぶきも果てぬ帰るさの空	氷雨が降っている。雁の翼に置いた霜は解けかねている。羽ばた きまきまもできず、ただ帰り道となる空だけが茫漠と広がる。	◇本歌取「霜まよふ空にしをれし雁がねの 帰るつばさに春雨ぞ降る」	
#####	雪月花 絶唱 交響	はや染(し)みぬもみぢの色はわく らばにほの見し袖は恋の病に	まだ夏なのに、早くも染まってしまった。もみぢの葉の色は、赤や 黄に。偶然に垣間見たあなたに恋した私の袖は、恋の病から流 す紅涙に。	◇掛詞「病葉に×邂逅に」 ◇縁語「染む、もみぢ、色、病葉、病」 ◇本歌取「わくらばにとはれし人も昔にてそ れより庭の跡は絶えにき」	
#####	雪月花 絶唱 交響	大空やとほき昔はもとにしてちか き袖にはなどうつらむ	大空に照る月の姿は遠き昔のままにして、なぜ我が身に近い袖 のみが涙をたたえ、月影を映すように変わったのだろうか。	◇掛詞「映る×移る」 ◇対句「とほし、空、昔・もと//ちかし、袖、う つる」 ◇本歌取「秋を経て昔はとほき大空にわが 身一つのもとの月影」	
#####	雪月花 絶唱 交響	さそふ梅なびく鶯夢うつ尾花と 鶯をうつす曙	春は、鶯を誘う梅、梅になびく鶯。秋は、鶯を誘う尾花、尾花にな びく鶯。夢うつつの春の曙のうちに、よく似た秋の曙を恋い慕う。	◇対句「さそふ、梅、尾花//なびく、鶯、鶯」 ◇本歌取「われぞあらぬ鶯さそふ花の香は 今も昔の春の曙」	
#####	雪月花 絶唱 交響	年月よ飛火(とぶひ)の過ぎし春 霞おのれ立ち出づる同じならひに	飛ぶ日のように過ぎゆく年月よ。飛火野には、また春霞がおのず と立つ季節がやって来た。野守もまた、霞に目を暗ましつつ、毎 年決まって見張りに就き、己の役目を果たし生きているのであった。	◇掛詞「飛ぶ日の過ぎし×飛火野」 ◇歌枕「飛火野」 ◇枕詞「春霞→立つ」 ◇本歌取「立ちなるる飛火の野守おのれさ へ霞にたどる春の曙」	
#####	雪月花 絶唱 交響	夢に詫び明石の渚須磨の浦藻塩 の空に消えぬ螢火	夢の中でさえ恋の将来を悲観する女。明石の渚、須磨の浦で焼く 藻塩のように、身は消え入りそうなのに、恋心だけは空に消えず 残る螢火のようである。	◇対句「明石の渚//須磨の浦」 ◇歌枕「明石、須磨」 ◇本歌取「須磨の浦藻塩の枕とふ螢仮寝 の夢路佳ぶと告げこせ」	
#####	雪月花 絶唱 交響	初風に袖の白玉もろき末(すゑ) は木(こ)の葉時雨も同じ冬かな	冬の初風が吹き、私の袖に白玉のようなもろい涙が落ち、同じよ うにもろい木の葉が時雨のように降り落ちる。	◇本歌取「秋といへど木の葉も知らぬ初風 にわれのみもろき袖の白玉」 ◇「木の葉時雨」	
#####	雪月花 絶唱 交響	月うつる鳩(にほ)の浮き巢の風 の音(ね)にまよふうらみは夜半 のさざ波	月が映る琵琶湖の鳩の浮き巢に、風が音を立てて吹く。別れたあ の人を恨もうかと迷い眺める夜の湖畔に、さざ波が打ち寄せる。	◇掛詞「鳩(の海)×鳩(鳥)」「恨み×浦見」 ◇歌枕「鳩」 ◇本歌取「さざ波や鳩の浦風夢絶えて夜渡 る月に秋の舟人」	
#####	雪月花 絶唱 交響	今もなき涙の平瀬最上川出でし みなどは袖の浦風	私の心は今も、涙が落ち着く平らな川瀬もない最上川のように です。無事に河口に流れ着いても、袖の浦に寂しい浦風が吹けばか りです。	◇歌枕「最上川、袖の浦」 ◇掛詞「袖の浦風×袖の浦」 ◇本歌取「袖に吹けさぞな旅寝の夢も見じ 思ふ方より通ふ浦風」	
#####	雪月花 絶唱 交響	人とはず鴨立ちかへり袖の沢沈 む心は秋の夜の底	人も訪れず、鴨も飛び立っていった、この秋の夜の宿の沢。私の 袖こそ涙で沢のようになり、心も沢の底に沈みゆくようだ。	◇本歌取「今はとて鴨も立つなり秋の夜の 思ひの底に露は残して」	
#####	雪月花 絶唱 交響	寄せ返る涙に出づる舟旅のわが 年月は果てもとまらず	我が人生は、寄せては返す波の上に出てゆく舟旅のようだ。涙も あるこの人生、この先も停泊する港はないだろう。	◇掛詞「涙×波」「止まらず×泊まらず」 ◇本歌取「行き帰る果てはわが身の年月を 涙も秋も今日とはとまらず」	